

附属学校国際教育推進委員会報告書（第12集）

～2020年度～

附属学校群の国際教育の推進



2021年3月

筑波大学附属学校教育局

附属学校国際教育推進委員会

目 次

1. はじめに	
筑波大学附属学校群における国際教育実践研究の目指すものは	
副学長・附属学校教育局教育長 茂呂雄二	3
2. 附属学校の国際教育	4
3. 共通コンセプトに基づく附属学校の国際教育の取り組み等	6
4. 各附属学校の国際教育活動	
(1) 先進的教育技術交流・児童の国際交流をめざして	
(附属小学校)	10
(2) コロナ禍における国際教育活動	
(附属中学校)	11
(3) グローバル人材の育成を目指して	
(附属高等学校)	14
(4) 2020 年度国際交流プログラムにおける生徒の海外・相互交流での活躍	
(附属駒場中・高等学校)	18
(5) コロナ禍でも WWL 抱点校として	
(附属坂戸高等学校)	24
(6) グローバル社会で活躍する視覚障害当事者の育成を目指して	
(附属視覚特別支援学校)	28
(7) 互いの文化を知り、学びを深める新しいスタイルの国際交流活動	
(附属聴覚特別支援学校)	32
(8) 附属大塚特別支援学校の国際教育の取り組み	
(附属大塚特別支援学校)	36
(9) コロナ禍における実践から国際的視野の獲得と自己発信の新たな可能性を考える桐が丘	
(附属桐が丘特別支援学校)	39

5. 各附属学校のイングリッシュルーム活動	
(1) 留学生との交流会	
(附属小学校)	43
(2) 今年度の English Room 報告	
(附属中学校)	44
(3) 附属学校のイングリッシュルーム活動について	
(附属高等学校)	46
(4) English Room：日常活動および海外研究発表とその先の支援	
(附属駒場中・高等学校)	47
(5) コロナ禍でもできる楽しい英語活動と WWL 校としての活動の両立を目指して	
(附属坂戸高等学校)	48
(6) 附属視覚特別支援学校のイングリッシュルーム活動	
(附属視覚特別支援学校)	49
(7) 「見る、聞く、話す、書く」を工夫したイングリッシュルーム	
(附属聴覚特別支援学校)	51
(8) 知的障害特別支援学校におけるイングリッシュルーム活動	
(附属大塚特別支援学校)	53
(9) オンライン実践の効果と児童生徒の国際的な捉え方を刺激するイングリッシュルーム	
(附属桐が丘特別支援学校)	54
6. おわりに	
本学附属学校での国際教育を振り返って	
附属学校国際教育推進委員会委員長 濱本悟志	59
(資料) 附属学校の国際交流協定締結状況	60
報告書発行の記録	65
委員会名簿	66

1. はじめに

筑波大学附属学校群における国際教育実践研究の目指すものは

副学長・附属学校教育局教育長 茂 呂 雄 二

今年度は COVID-19 感染拡大により一斉休業および緊急事態宣言で始まり、オンラインによる遠隔授業や制限された分散登校の中で教育活動を再開し、国際教育も新たな形態を模索し続けた一年であった。移動と宿泊の伴う行事はすべて中止となり、海外派遣も海外からの受入れも実施不可能な状況下で、如何に国際交流を継続させていくかの課題に多くの学校が頭を悩ませた。しかし、状況を嘆くばかりでは何も生まれない。窮地に追い込まれた時の創意工夫を報告することは、今後の国際交流の在り方を前進させるとの思いから、第 12 集の刊行に踏み切ることにした。

筑波大学附属学校群は、第 3 期中期計画・中期目標（2016～2021 年度）において、次のような国際教育およびグローバル人材育成に関する実践研究を進めている。

- ①『スーパーグローバルハイスクール事業（SGH）や国際バカロレア教育システムの構築、附属学校教育、大学教育を通じてグローバル人材を育成する。』
- ②『スーパーグローバルハイスクール事業や国際バカロレア教育による高大連携を通したグローバル人材育成システムの構築、及び教育系の大学院と組織的に連携し高度な専門性をもつ教師の育成システムの構築を行う。』
- ③『先導的教育拠点、教師教育拠点、国際教育拠点の成果を活かし全国の大学・附属学校と「コンソーシアム」を構築し、グローバルな素養を育てるカリキュラムを開発・提案する。』

これらの中核であった文部科学省によるスーパーグローバルハイスクール事業（SGH）は、2018 年度をもって終了となり、その後継事業として 2019 年度より、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業が開始され、本学も SGH に続き採択された。さらに全国の幹事管理機関を委託され、WWL 事業によるグローバル人材育成の全国展開において重責を果たすこととなった。

この WWL 事業では、附属坂戸高校を拠点校として、附属高校、附属駒場高校ならびに特別支援学校の高等部も加わり、本学のリソースを活用した高大連携を果たしながら、国際教育・グローバル人材育成の探究型カリキュラム開発を開始したところである。この事業のコンソーシアムには、国内外の高校や大学ならびに東南アジア教育大臣機構等とも連携する、きわめて大規模で重厚なネットワークが構築できている。国内外でのフィールドワーク等を通して、生徒達が学びと交流を進めて行くことを目指した。

本学附属学校群は、従前から国際教育実践研究を継続してきている。附属学校群には 3 つの拠点構想に基づく実践研究があり、そのうちのひとつが「国際教育拠点」である（他の 2 つは「先導的教育拠点」「教師教育拠点」）。これは、「社会の要請に基づく、国際的視野をもった基礎学力の修得や生涯学習体系の基礎モデルとなる先導的な初等・中等教育拠点を形成する」とする中期目標に沿って、『自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養い、積極的に外国の人とコミュニケーションを取る態度を養う』ことを目指している。

最後に国際教育に限らず、今日、教育実践の成果検証が求められる。これは言うは易しいが非常に困難な課題である。現行の評価は個人単位である。投下した資源に対してどれだけ個人効果が上がったのかの報告を求められることが多い。適当な方法でインプットすれば個人の“伸び”と称するものが出ては来るが、学校や学級というグループやコミュニティーの成果とはどう測れば良いのだろうか。コンソーシアム全体の成果にどのような物差を当てれば良いのか。国際教育の意味を理解するためにも、成果とその検証を再考する時期に来ている。

2. 附属学校の国際教育

国際教育の推進の必要性

なぜ、国際教育は必要なのか？

「ヒト」や「情報」が国境を越えて高速移動している。このため、国際化に対応した能力は、一部の人だけではなく、誰にでも必要な能力となってきている。このような社会の中で活躍できる人材を育成することが附属学校の使命。

取引先の担当者が外国人だけ
ど、どう接したらいいの？

海外勤務になったけど、異文化
になじめるの？



海外に支店や工場を
つくることになったけど、
日本とは何が違うの？

グローバル社会で求められる能力とは？

例えば、異なる国や文化の人々と臆せず積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や、相手の文化的・社会的背景を踏まえた上で、相手の意図や考えを的確に理解し、自らの考えに理由や根拠を付け加えて、論理的に説明したり、議論の中で反論したり相手を説得したりできる能力などがあげられる。



要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感、使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

国際社会における筑波大学の使命

●21世紀において国際社会へ向けて果たすべき本学の役割は、

- (1)高い研究レベルに裏打ちされた「知の蓄積と発信」
- (2)国際的リーダーとなる人材の輩出
- (3)国際的な連携の構築

であると考える。

●筑波大学は、急速にグローバル化が進む世界情勢のなかで、世界をリードする研究型大学としての使命を果たすために、未来を切り拓く知の創造を通じて、地球規模課題に対する解決策を提示することを目指す。

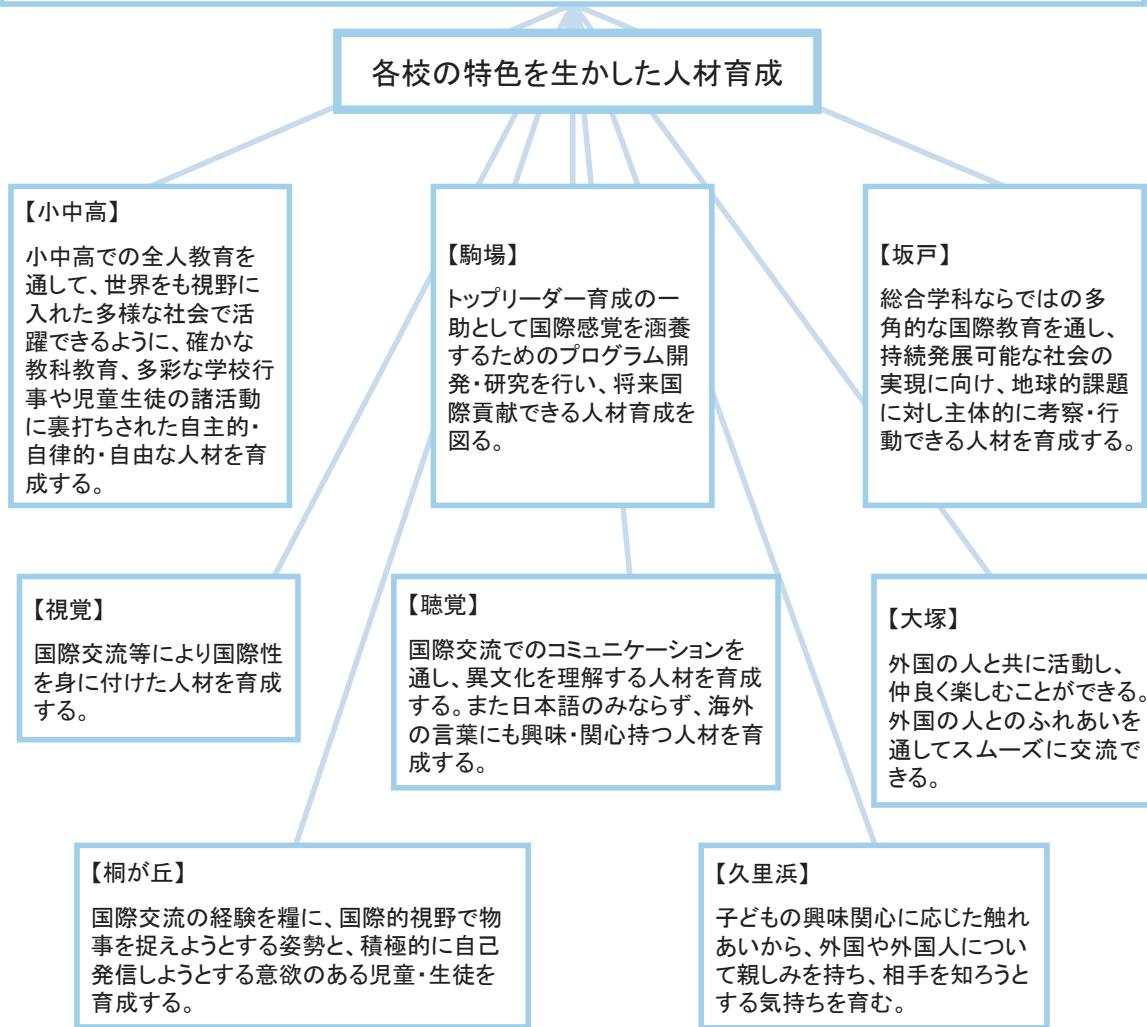
附属学校における取組

「国際化対応能力を培う国際教育拠点」をかかげ、各校の特色を生かした国際教育を推進

国際化対応能力を培う 国際教育拠点

附属の共通コンセプト

- 幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養うとともに、積極的に外国人の人とコミュニケーションをとる態度を養う。
- 教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために出来ることを考える。



3. 共通コンセプトに基づく 附属学校の国際教育の取り組み等

		小学校	中学校	高校	駒場中・高校	坂戸高校
共通コンセプト		幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にする態度を養うとともに、積極的に教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために				
各校の国際教育の目標 (国際教育を通じて育成する生徒像)		小中高での全人教育を通して、世界をも視野に入れた多様な社会で活躍できるように、確かな教科教育、多彩な学校行事や児童生徒の諸活動に裏打ちされた自主的・自律的・自由な人材を育成する。		トップリーダー育成の一助として国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材育成を図る。	各校の特色を生かし 総合学科ならではの多角的な国際教育を通じ、持続可能な社会の実現に向け、地球的課題に対し、主体的に考察・行動できる人材を育成する。	
(国際教育を通じて広がる教師力)		・諸外国の児童・生徒の実態、教育事情を実際に体験することで、世界に誇ることができる日本の教育の特色（長・短を含む）を再認識することができる。 ・プレゼンテーション能力を向上することができる。	・現地の授業・生活を直接体験することで、教師に求められる指導力や指導の方法が国によって異なったり、国を越えて共通していたりたりすることを理解する。又教師自身が他国との交流を通じて国際社会の現状の一端を実感する。	・教師の語学力向上を図るとともに、他の国・文化を尊重できる国際的な感覚を身に付ける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。	・教師の語学力を高めるのみならず、海外との交流を通じて異文化理解を深める。	・教科の枠を超えた協働により、教師それぞれが持つ知見を活かしながら、地球的課題を意識した教育を行う力を身につける。
(国際貢献)		・国内へ発信している教育成果を海外教育技術支援へ活用。	・国内各地へ発信している教育技術や、教師教育の成果を海外の先生方とも共有する。	・国内へ発信している教育成果を、海外へも発信する。	・海外、とりわけアジア諸国の学校の生徒と研究発表を行うことでお互い切磋琢磨することができる。同時に文化的な交流をし、お互いの理解に貢献する。	・本校との協働を通し、アジアの各校に対して本校とともに持続発展可能な社会のあり方について考える機会を与える。
取組 (令和元年度)	幼児児童生徒	・ハワイ大学附属小学校、附属高等学校との児童交流会、親子20組参加 ・同時にワイキキ小学校との交流会も実施 ・北欧授業交流（デンマーク、リンビートーベック市との提携による授業研究会） ・筑波大学外国人留学生との交流会	・アメリカ短期留学（West-Mont Christian Academy）に36名が参加 ・シンガポール短期留学（Hwa Chong Institution）に1名が参加（附属高校と合同で実施） ・深圳中学、龍崗初級中学が訪問。生徒同士の交流会も実施。	・国際学術シンポジウム（HAS）に生徒派遣3名、韓国。 ・アジア太平洋青少年リーダーズサミット（APYLS）に生徒派遣3名、シンガポール。 ・プリンスエドワード島大学へ生徒派遣16名、カナダ。 ・国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム、生徒派遣2名、フランス。 ・日中高校生交流（北京）生徒派遣9名、ホームステイ受け入れ10名。中国北京市。 ・Hwa Chong校との交換留学、生徒派遣9名、ホームステイ受け入れ9名、シンガポール（生徒派遣については、コロナウィルスの影響で延期予定） ・各種国内会議（高校生国際ESDシンポジウム、全国高校生合同フォーラム、クーベルタン嘉納ユースフォーラム、模擬国連など）において生徒発表。	・筑波大学外国人留学生との交流（文化祭訪問） ・さくらサイエンス・ハイスクールプログラム「大隅博士特別講演」4月23日（火） ・インド他の高校生と引率者、合計112名が来校。 ・台中一中の本校訪問（5月28日（火）） ・台中一中訪問2019年12月10日（火）～15（日） （高1・4名、高2・12名） 理数を中心とした研究発表交流 ・国際学生科学フェア2020（ISSF）、2020年1月15-20日（Thailand）（2名） ・釜山国際高校、本校訪問1月16日（高校生16名） ・釜山国際高校訪問3月24日～28日（高1・6名、高2・6名）発表活動・文化交流	・AIMS留学生33名と交流 ・JSTさくらサイエンスプログラム タイ・インド・ブルネイから高校生団体55名受け入れ ・台湾・新竹県立湖口高級中學生徒28名教員2名受入 ・「国際フィールドワーク」実施、生徒7名 ・姉妹校、コルニタ高校訪問 ・インドネシア姉妹校へ2名1年間留学 ・オーストラリア夏季研修プログラム 生徒18名、教員3名参加 ・WWL事業「高校生国際シンポジウム・The 1st SDGs Global Engagement Conference @ Tokyo」 ・フィリピン大学附属ルーラル高校スタディツア－生徒2名教員1名受け入れ ・卒研支援プログラムで韓国へ生徒1名渡航 ・台湾臣民高級中学校に1名1年間留学

視覚特別支援学校	聴覚特別支援学校	大塚特別支援学校	桐が丘特別支援学校	久里浜特別支援学校
外国人の人とコミュニケーションをとる態度を養う。 出来ることを考える。				
た国際教育の取組				
国際交流により国際性を身に付けた人材を育成する。	国際交流でのコミュニケーションを通じ、異文化を理解する人材を育成する。	外国人と共に活動し、仲良く楽しむことができる。 外国人とのふれあいを通じてスムーズに交流できる。	国際交流の経験を基に国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲。また、その実践の場を校外にも求める主体性のある児童生徒を育成する。	子どもの興味関心に応じた触れ合いから、外国や外国人の人について親しみをもち、相手を知ろうとする気持ちを育む。
<ul style="list-style-type: none"> ・外国文化の研鑽を深める機会となる。 ・国際教育を通じて、グローバルな視野、コミュニケーション能力を身につける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師自身の視野を広め、語学力の向上を図る。そして聴覚障害教育の国際教育拠点の学校として、海外に発信できる力を身に付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外国文化の研鑽を深める機会となる。 ・国際教育を通じて、グローバルな視野、コミュニケーション能力を身につける。 ・日本の文化を他国の人々に紹介できるスキルを高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国際教育を推進する過程を通して、他国教師らとの間に信頼関係を築き、人的ネットワークを広げていこうとする。 ・国際感覚・国際コミュニケーション能力を身につける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師のコミュニケーション能力を向上させ、新しい知識や技能を身に付けるきっかけとする。
<ul style="list-style-type: none"> ・アジア諸国の視覚障害教育発展に寄与。 ・アジア諸国の視覚障害者職業自立推進に寄与。 	<ul style="list-style-type: none"> ・聴覚障害教育における指導法や教材教具の有効活用を具体的に国外の教育現場に提供する。特にフランスやアジア諸国に発信する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・知的障害児教育に関する指導法や教材教具の紹介。 ・海外からの研修生の受け入れおよび授業研究の協力。 	<ul style="list-style-type: none"> ・我が国の肢体不自由教育が培ってきた知見・技術等を他国の教育関係機関に向けて発信する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自閉症児教育に関わる海外の特別支援学校関係への成果発信。
<ul style="list-style-type: none"> ・ダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業で高等部生徒2名がイギリスで研修、インクルーシブ教育で学ぶ視覚障害生徒やパラリンピック金メダリストとの交流、英国盲人協会訪問など ・トビタテ！留学JAPANのプログラムでタイ視覚障害者支援クリスチャン財団の盲学校で留学、交流とホームステイなど 高等部生徒1名 	<ul style="list-style-type: none"> ・フランス国立パリ聾学校とのスカイプ交流 ・フランス国立パリ聾学校へ高等部普通科生徒9名と教員を派遣し、交流 ・高等部専攻科造形芸術科の臺北市立聾学校と國立臺南大學附屬聾學校との作品交流 ・韓国ソウル聾学校とのスカイプ交流 	<ul style="list-style-type: none"> ・台湾国立屏東特別支援学校高等部の生徒8名と本校高等部の生徒23名が、ライフキャリア学習（作業学習）での授業交流 ・給食で海外の料理を体験：「オリパラ給食デー」の実施 ・中学部および小学部におけるALTの教員による英語の授業の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・台湾 国立南投特殊教育学校、国立和美実験学校へ訪問 生徒1名 ・韓国 広州セロム学校へ訪問 生徒1名 ・海外渡航した生徒代表による台湾・韓国国際交流報告会 ・台湾 国立和美実験学校とのネットワーク回線を用いた授業交流 ・韓国 広州セロム学校とのネットワーク回線を用いた授業交流 ・IOC Youth Summitへの参加 生徒2名 ・筑波大学外国人教員研修留学生7名（インド1名、モンゴル1名、ブラジル1名、ペルー1名、クロアチア1名、マラウィ1名、ナイジェリア1名）と高等部生徒との国際交流 	<ul style="list-style-type: none"> ・海外からの見学者との交流 (タイ 教育関係者見学(33名)、中国障害児インクルーシブ教育特別研修(23名)、日系協会日系日本語学校(7名、ブラジル、ベネズエラ、パラグアイ、アルゼンチン)、中国長沙市特殊教育学校教員研修(5名)、韓国国立特殊教育院(3名)、中国廣東省第二師範学院教員研修(5名)、中国教育国際交流協会(25名)、フィンランド教育委員会(1名)、JICA日系社会研修(15名、ブラジル、アルゼンチン)

		小学校	中学校	高校	駒場中・高校	坂戸高校
取組 (令和 元年度)	幼児児童 生徒			<ul style="list-style-type: none"> ・海外派遣生徒を対象としたネイティブ講師による放課後研修、郊外から講師を招聘して韓国講演会、シンガポール講演会の実施 		
取組 (令和 元年度)	教師国際 貢献会	<ul style="list-style-type: none"> ・北欧授業交流（デンマーク、ポルトガル）に4名の職員が参加参加 ・インドネシア教育大学視察団による授業参観（20名） ・タイコンケン大学研究会参加（20名） ・ロシア、カザフスタン、ウズベキスタン授業参観（10名） ・マレーシア視察団参観（22名） 	<ul style="list-style-type: none"> ・北京中国国際交流協会より参観 ・マレーシアサラワク州より教育大臣視察 	<ul style="list-style-type: none"> ・日中交流ホームステイ10名受け入れ ・シンガポール、ホーチミン校から生徒9名+教員2名来校、交流 ・海外からの教育見学の受け入れ。 ・各種国内会議（高校生国際ESDシンポジウム、全国高校生合同フォーラム、クーベルタン嘉納ユースフォーラム、模擬国連など）参加 ・オーストラリア教員研修と次年度国際合同フィールドワーク実地踏査、教員1名参加、オーストラリア。 	<ul style="list-style-type: none"> ・筑波大学外国人教員研修留学生訪問研修、12名受け入れ・校内案内 ・さくらサイエンス・ハイスクールプログラム「大隅博士特別講演」4月23日（火）インド他の高校生と引率者、合計112名が来校。 ・台中一中の本校訪問の引率教員対応 ・台中一中訪問 2019年12月10日（火）～15日（日） (引率3名) ・国際学生科学フェア2020（ISSF）、2020年1月15-20日 (引率教員1名) 釜山国際高校、本校訪問1月16日 (高校生16名) 生徒受け入れ案内 ・釜山国際高校訪問 3月24日～28日 (引率3名) 	<ul style="list-style-type: none"> ・韓国ユネスコ国内委員会招聘事業で教員1名、韓国へ派遣 ・中国ユネスコ国内委員会招聘事業で教員1名、中国へ派遣 ・「国際フィールドワーク」インドネシアにて実施 ・留学生3名（タイ2名、台湾1名）1年間受け入れ ・「高校生国際シンポジウム・SGH校生徒成果発表会」実施 ・ESD推進ネットワーク全国フォーラム2019で教員1名登壇 ・SEA-Teacherプログラムでアセアン大学生の教育実習6名受け入れ
環境整備	現状	<ul style="list-style-type: none"> ・多目的教室「未来の教室」の設置。 	<ul style="list-style-type: none"> ・英語が話せる者が常駐し、生徒が自由に活用できるイングリッシュルームの設置。 	<ul style="list-style-type: none"> ・イングリッシュルームの設置 ・ウェブ会議のシステム。 	<ul style="list-style-type: none"> ・高度情報化事業に伴い、スカイプなどを利用して海外派遣先の生徒と校内残留生徒との交流を検討中。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スカイプ。 ・多目的交流棟の設置。
将来構想		<ul style="list-style-type: none"> ・英語専科教員の増員（小学1年生からの英語教育導入のため）。 ・継続的な財政的基盤を得て、渡航費・通訳費の確保をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・A L Tとのチームティーチングを中心に、少人数での授業を展開する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブ会議のシステム。 ・実習生・留学生等の受け入れのための宿泊施設。 ・本校生徒の海外留学、海外からの留学生受け入れのための奨学金制度。 	<ul style="list-style-type: none"> ・海外派遣で交流の確立している相手校とテレビ会議等で交流を定期的に行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・校内Wifiの整備を行い、日常的に海外の学校と学びあえるようにする。 ・アセアンを中心にアジアの高校生向けの奨学金制度を創設し、坂戸高校で日本語学習を実施し、筑波大学に入学できるようにする。

視覚特別支援学校	聴覚特別支援学校	大塚特別支援学校	桐が丘特別支援学校	久里浜特別支援学校
	<ul style="list-style-type: none"> ・韓国国立ソウル聾学校中学校生訪問に向けて教員5名派遣 ・アメリカオハイオ州立大学聴覚障害教育部門、オハイオ州立聾学校等の視察、研究交流会に教員3名派遣 	<ul style="list-style-type: none"> ・インドネシアの私立学校（チバガンディ特別支援学校）との教員間Web会議の実施、研究授業における動画鑑賞、意見交換、指導案（翻訳済み）の共有 	<ul style="list-style-type: none"> ・中国廈門市日本特別支援教育使節団（12名）の受け入れ ・香港 NAAC からの視察団（教育・福祉関係者32名）の受け入れ ・香港教育大学からの視察団（7名）の受け入れ 	<ul style="list-style-type: none"> ・受け入れ研修：中国長沙市特殊教育学校教員研修5名、中国広東省第二師範学院教員の研修6名 ・多くの見学の受け入れ（タイ教育関係者見学、中国障害児インクルーシブ教育特別研修、日系協会日系日本語学校（ブラジル、ベネズエラ、パラグアイ、アルゼンチン）、韓国国立特殊教育院、中国教育国際交流協会、フィンランド教育委員会、JICA日系社会研修（ブラジル、アルゼンチン）
<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブ会議システム。 	<ul style="list-style-type: none"> ・筑波大学内のウェブ会議システム。 	<ul style="list-style-type: none"> ・Web会議の環境構築のために必要な機材（パソコン、Wifi、ポケット翻訳機、iPad）および現地通訳者の手配 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブ会議システム。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブ会議のシステム。 ・図書館に海外絵本コーナーを設置。
<ul style="list-style-type: none"> ・留学生支援の充実。 ・国際交流協定校との継続的な取り組みタイの生徒が本校で学ぶ短期留学プログラム制度を作る。 ・国際交流協定校を増やしていく、視覚特別支援学校の国際拠点校として発信を続けていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学外へも公開できる「国際コミュニケーションルーム」の開設。 ・常設展と巡回展を行う。常設展には姉妹校のパリ聾学校・フランス関係の展示や児童生徒の調べ学習成果物・海外の絵本展示を行う。また巡回展として、11附属巡回展のようなスタイルでの海外の衣食住、教育について紹介するスペースをつくりたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・継続的な授業研究における教員同士、生徒同士の海外交流。その為の、Web会議における環境設定、予算等の確保 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウェブ会議システムを活用した授業交流、情報交換を一層充実させる。 ・海外への教員派遣を拡充し、研究成果等の対外発信力を強化する。 ・北欧等の特別支援学校との交流を実現させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・海外からの講師招聘型研修会を定例化すると共に、内容を録画編集し、国内外に向けた研修データライブラリーを整備する。 ・テレビ会議等のシステムを利用して、定期的に授業研究会等を行う。

4. 各附属学校の国際教育活動

附属小学校

先進的教育技術交流・児童の国際交流をめざして

1. 本校の国際教育の特徴

筑波大学附属小学校（以下「本校」）は、国内の教育研究校としての使命、責任感をもって教育研究を進めている。その成果を生かして、海外教育技術支援、海外教育技術交流を行い、相互の教育技術の高まりをめざし、国際教育を推進している。

本年度は、コロナ感染拡大の影響で、全ての計画が中止となってしまった。

- | | | |
|----------------|------------------|------------|
| ① 海外校との授業交流 | 北欧授業交流（中止） | 日韓授業交流（中止） |
| ② 児童の海外交流 | ハワイ大学附属小学校交流（中止） | |
| ③ 児童の国際理解環境の充実 | 留学生とのオンライン交流 | |
| ④ 国際支援 | なし | |



コロナ禍における国際教育活動

1. 例年行っていた短期留学プログラム中止の経緯

(1) 令和2年3月に予定していた留学プログラム

令和2年2月28日から全国一斉臨時休業措置に伴い、アメリカ短期留学、シンガポール短期留学プログラム中止の決定をした。

(2) 令和3年3月に予定していたアメリカ短期留学プログラム

① 当初の計画

日 程：令和3年3月21日（日）～30日（火）

対 象：2年生および3年生 合計36名（予定）

- ・本校生徒として責任ある行動がとれる者
 - ・英語で積極的にコミュニケーションをとる意欲がある者
 - 昨年度までは4月～10月の応募までに、English Roomに自主的に2回以上参加している生徒という条件があったが今年度は削除（臨時休校のため）
 - ・事前研修および春休み中の「事後まとめの会」に全て出席し、報告活動（レポート・ポスター作成、加えて2年生はHRHや説明会での発表など）を全うできる者
- ※令和2年度参加予定だったが、中止により参加できなかった生徒も、参加希望する場合は再度応募すること。

内 容：ペンシルベニア州でホームステイと授業参加、フィラデルフィア観光（予定）

West-Mont Christian Academy（キリスト教の私立学校）（予定）

本校教員2名が引率する他、添乗員が同行。現地にはコーディネーターが常駐。

今後の流れ：①夏休み前に実施要項配布

- ②9月中にオリエンテーション実施（ISAと日程を相談）
- ③10月中旬に応募締め切り
- ④10月末に選考
- ⑤11月初旬に選考結果発表
- ⑥12月より事前研修開始

参加費：約40万円（燃油サーチャージ代変動のため、変わるべき可能性がある）

新型コロナウィルスの影響について：

- ・各国の入出国制限、感染症危険情報レベル、現地および日本国内の状況等により、キャンセルせざるをえなくなった場合の対応についての詳細は、今後ISA（International Student Advisor）や現地コーディネーターと相談した上で、オリエンテーションで周知する。
- ・航空券や現地滞在費のキャンセル料が発生しない時点で実施の可否を決定する。

② 中止の判断と代替案の検討

5月中に①で示した計画を立てたが、実施要項配布予定の7月末時点での日本及びアメリカの新型コロナウィルス感染状況、および、海外渡航が難しい状況であったため、今年度も短期留学プログラムは募集を行わないことを決定した。

代替案として、国内、オンラインでの国際交流プログラムも検討したが、日程および内容を吟味する時間等がないことから、今年度は代替案の実施も見送ることとした。

2. コロナ禍における2年生 HRH（ホームルーム・アワー）の取組について

第2学年で実施した国際教育の側面を持つ教育活動 シリーズもの学習「立場を超えて、広がる輪」2年生バージョンについて報告する

① 活動報告

HRH（ホームルームアワー）とは、本校独自の時間であり、特別活動と道徳を合わせた時間である。週2時間で、内容は、「オリエンテーション」「行事と私たち」「自治活動と私たち」「学習と生活」「心身の健康」「人間関係を考える」「社会と私たち」「その他」と示されており、この内容に沿った活動を行う。さらに、HRHの中でこれらの内容からテーマを決め、数時間かけて学びを深めるものを「シリーズもの学習」としている。

昨年度のHRH「シリーズもの学習」では、「立場を超えて、広がる輪」というテーマを設定し、「障がいについて知る」→「考える」→「体験する」→「共有し、より深く考える」という流れの中で、学びを得てきた。そして、3月からの突然の長期の休校となり、誰一人として経験したことのないこの状況下で、「新型コロナ報道について」や、「この状況下でできること」をテーマに、学習支援クラウド「ロイロノート」を活用し、204人で意見交換を行うという活動を行った。「新型コロナウィルスに関して、常に世界各国と日本の感染者数を確認したり、対応策を比較したりしている」「この瞬間、世界で何が起きているのかを知り、積極的に関わることが大切」、また、報道に関しては、「報道だけに頼らず自分で調べる」「1つの報道を鵜呑みにするのではなく、いろいろな情報を得る」「報道自体を多面的に見ることが必要」など、さまざまな意見が出され、オンライン上ではあったが活発なやり取りができた。

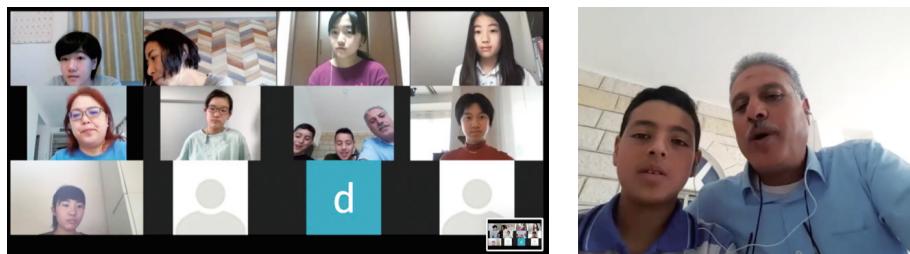
そんな中、新型コロナウィルスの問題に関して、アメリカやイタリア、フランス、中国…こうした国々についての報道はたくさんされているが、支援を必要としている国々や元々閉鎖的な地域はどのような状況なのだろうか、という疑問が出された。それを受け、「こんな時だからこそ、世界の人々と一緒に、リアルに声を聞いてみてはどうだろう？」「この危機的な状況下でも活動している日本人や組織があるということを、ぜひ知って欲しい」「さまざまな立場の方々から直接話を聞いて、私たちから「輪」をどんどん広げていきたい」このような思いから、JICA（国際協力機構）のザンビア事務所、そしてパレスチナ事務所の方々に協力していただけることとなり、この学びがスタートした。閉鎖された時期にこそ、自分自身の視野をさらに広げてほしい、世界に目を向けることで、日本という国に住む自分自身を振り返る機会としてもいたい、という強い願いが込められた活動となつた。そうすることで、学年目標である“Respect”を再認識し、なりたい自分の「ありかた」も考えるきっかけとなった。

休校中のオンラインを使ってのリモート学習ということで、最初に設定した目標は「自分自身を振り返り、見つめる」「他人の考え方を知り、視野を広げる」という2つのみであった。しかし、約一ヶ月間のこの取組を終え、「互いに協力する」「自治活動の能力を伸ばす」「他人の考え方や立場を思いやる」といった、休校中では難しいと思っていたHRHのねらいも生徒自身の力で達成できたのではないか。インタビューの回数を重ねるごとに、生徒たちの「もっと知りたい」という欲求が高くなり、議論も深まっていくのを感じた。さらに、聞きたい質問が多くすぎて絞るのに苦労している場面もあった。この取組を通して一番感じたことは、教師は「コーディネーター」であり、生徒たちは想像以上に自分たちで学びを得る力を持っている、ということであった。

「僕の夢は、パレスチナに公平と正義が訪れること」

これは、パレスチナ人のモハメドくんと将来の夢をお互いに伝え合っているとき、彼から出てきた言葉である。この言葉には、多くの生徒が衝撃を受けたようで、書いてきた感想からもそれが伝わってきた。「戦争のない、平和な日本に生まれて幸せ」そう思っただけで終わりではなく、「モハメドくんの住む地域に平和がやってくるために、私にできることは何だろうか？」や「本当の平和とは何だろうか？」「公平と正義とは？」といった問い合わせを探究し続けてほしい、そう強く思った。とても壮大

な問い合わせであり、もちろんはつきりとした正解があるわけではない。しかし、そんな自分自身への「問い合わせ」を探し、追究していける力をもっと育んでいきたいと強く感じた。



パレスチナ事務所インタビュー
現地スタッフであるラスランさんとその息子さんであるモハメドくんとのインタビューの様子



ザンビア事務所インタビュー
JICA職員の松村さん、現地スタッフであるムワバさん、マラマさんとのインタビューの様子

② 生徒の感想

今回のインタビューで、世界には様々な状況におかれた国がたくさんあるということを改めて知りました。私は、パレスチナとイスラエルの関係について興味を持ちました。今までニュースで見たことは何度かあったのですが、実際にそこに住んでいる方々のお話を聞くのは初めてだったので、「遠くの国」という認識から親近感のようなものがわきました。今回私が感じたのは、戦争の解決は一筋縄でいかないということです。イスラエルもパレスチナも色々な歴史や情報などによってこのような事態になってしまったのだと思います。なかなか解決するのは難しいと思います。しかし、私としては今こそ団結すべきときなのではないかと思いました。コロナウイルスが猛威を奮っている現在、諸外国との助け合いはとても重要だと感じます。人間というものは共通の敵をつくると団結するという習性があると私は思います。お互いに争うのではなく、民族、国境に関係なく広がっていくウイルスを敵にすることで仲が少しでも解決するのではないか。でも、現実は米中対立が深まったりと難しいです。私たち日本人はそれを黙って見ているのではなく、JICAの取り組みを理解し、自分たちでも考えていくことが大切だと思います。これからも、国際情勢に目を向けていきたいと思います。

私はパレスチナのインタビューの事後報告を見ていて、今の自由があることは当たり前のことじゃないんだ、そうじゃない人たちもいるのだなと思った。パレスチナのインタビューに対して、ラスランさん達は平和で豊かで自由のある国にしたいということをおっしゃっていた。今のパレスチナはイスラエルに占領されていて、パレスチナの人たちはあまり自由に動けない。正直私は他の国の方たちの生活をあまり考えたことがなく、今の日本のような自由でみんなが満足できるような暮らしが当たり前のような気がしていた。けれど、今回のラスランさんたちの意見を聞いて申し訳ない気持ちになった。私たちのような自由な生活ができるることは決して当たり前なことではなく、本当に恵まれている。世界には自由に生活できない人が何人もいるのだと思った。またそれと同時に、自由な生活を送っていない人たちに対して、私たちができる支援は何だろうと考えてみた。募金や物の寄付、現地では学べないようなことを日本が教える…などなど。本当にいろいろなことがあると思う。たとえ小さな支援だとしてもそれを積み重ねていけば大きな支援に繋がるから、やっていくべきだ。私はこのようなことを率先してやっていけるような人になりたいと、このHRHを通して思った。

グローバル人材の育成を目指して

1. 本校の国際教育の特徴

2年前にスーパーグローバルハイスクール（SGH）事業が終了している。今年度も、昨年度に引き続き SGH 指定期間から行ってきた取り組みを失うことなく、その成果を引き継ぎ発展させ続ける目標を立てていた。専門性と教養、問題解決能力、コミュニケーション能力とプレゼンテーション能力、主体性と協調性、異文化理解の柔軟性と日本人としてのアイデンティティーを備える「グローバル・シチズン」の育成と、それらに加えて高い語学力、議論する力、地球規模の視点を有する「グローバル・リーダー」の育成を目指すためである。また、SGH ネットワークへの参加を予定しており、国際交流の拠点校の一つになれるように努力し続けている。

SGH 事業が終了したことで、残念ながら財政面には影響が出ている。比率教員数を減らしたり、生徒の自己負担金を減額したりすることもなかなか難しく、何らかの形で財源確保の方法を考えなければならならない。2020 年度は、COVID-19 の感染拡大の影響により、本校が伝統的に行って來た国際交流のすべてが通常の形式で実施できなかった。しかしながら、招聘や渡航を伴わない形であっても、オンラインなどの方法で交流を続けることが大切であるというスタンスは持ち続けたい。

2. 活動報告

(1) 第 14 回アジア太平洋青少年リーダーズサミット (APYLS)

7月 18 日～21 日の 4 日間、シンガポールの HWA CHONG INSTITUTION (HCI) 主催の HWA CHONG GLOBAL DIGITAL YOUNG LEADER CONVENTION (HC-GDYLC) に本校の 2 年生 3 名（朝倉彩佳さん、奥村咲希さん、中村真実さん）が参加した。例年は HCI 現地で「アジア太平洋青少年リーダーズサミット (APYLS)」として行われるが、今年は COVID-19 の感染拡大の影響でオンラインでの開催となり、7カ国 17 校からの計 101 名の高校生が交流を行った。

3 人それぞれの交流写真は以下の通りであり、本校から参加し生徒が 1 名ずつ入っている。

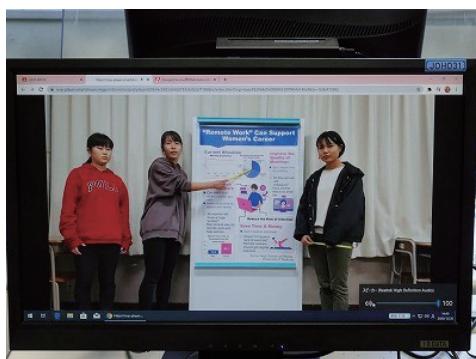
the RI in the midst of a discussion



サミットでは、現在の状況を模したパンデミック禍の架空世界で 10 の架空の国（チーム）が問題解決に向けて英語で交渉を行うという RPG 型のディスカッションが行われ、本校生徒はそれぞれ異なるキャラクター（ジャーナリスト、ソーシャルワーカー、スラム街の代表）になりきって議論した。

また、著名な方々の基調講演や文化紹介プレゼンを通じても学びを深めることができた。対面での交流が実現できず残念だったが、オンラインによるサミットという今までしかできない経験は貴重なものとなった。例年は、14カ国27校程の学校が各国から集まり、HCIの寄宿学校で共同生活を行っている。テーマごとのグループに分かれ、政府機関や研究機関などを訪問し、討議を重ねて意見をまとめ発表することが主たる活動であるが、本年度はオンライン開催ということで異なった形式で実施された。残念ながら渡航して直接的な交流はできなかったが、COVID-19の感染拡大があっても、オンラインによる交流で実施でき、次年度開催につなげることができたと考えている。生徒は、「オンラインでも、こんな凄いことができるんだな！」という感想を持っていたようである。

なお同じ3名は、2020年12月20日（日）にオンライン開催された「2020年度全国高校生フォーラム」に参加し、プレゼンテーションを行った結果、「生徒投票賞」を受賞し、本校を含む入賞した学校すべてがプレゼンテーションの内容を英語で解説した。発表タイトルは、“Remote Work” Can Support Women’s Careerであり、コロナ禍の中の問題点を分析したタイムリーな発表を行った。わかりやすいポスターも作成でき、3人で協力して説得力ある発表ができた。



Onlineによる発表動画



入賞したポスターの英語による解説（1）



入賞したポスターの英語による解説（2）

(2) 第11回国際学術シンポジウム (HAS)

毎年7月下旬に約5日間にわたり、韓国ソウルのハナ高校で国際学術シンポジウムが開催されており、本校からは毎年3名の生徒が参加している。このシンポジウムはハナ高校が主催しているもので、昨年度の場合、ハナ高校の学生約200人とアジア数カ国（日本、中国、香港、タイ）、ブルガリアからの高校生が加わって、計91人が参加した。

本年度はオンラインによる開催となり、本校からは2年生の芝田和樹くん、吉田千夏さん、金鱗さん3名が、国際シンポジウムにおいて研究発表を行った。その発表のタイトルは「Internship Using online Technologies」である。

また、同じ3名は、韓国の国際シンポジウム（HAS）以外に、筑波大学附属坂戸高校が幹事校であるWWL関連の「高校生ESDシンポジウム」にも参加し、会議は発表、質疑応答などすべてが英語で行われた。HASでは口頭発表に加えて、英論文執筆、さらに文化交流として「おはぎの作り方」

を披露した。生徒3名は、各国のトップレベルの高校生を相手に、非常に流暢な英語で高度な発表を行い、コロナ禍における貴重な、そして新しい国際交流となった。



第11回国際学術シンポジウム（HAS）



高校生 ESD シンポジウム

（3）シンガポールの HWA CHONG（ホワチョン）校との交換留学

毎年3月下旬には、本校の高校生9名がシンガポールに渡航し、ホームステイをしながらホワチョン校で授業を受け、シンガポールにおける高校生活を体験している。また6月には、ホームステイをさせていただいたホワチョン校の同じ生徒が来日し、本校での授業に参加しながら日本の高校生活を体験している。両校が共にホームステイを体験しながら実施する国際交流であるため、本年度の招聘及び渡航ができなかったことは大変残念である。

しかし、両校で知恵を絞り合い、毎年ほぼ同じ時期にシンガポールのホワチョン校へ短期留学している関西大学高等部の高校生も交えて、わずか数時間だけではあるが、オンラインによる交流を行うことができた。

代替交流自体は、11月17日（火）の放課後に数時間で実施され、事前に学校紹介、日本の紹介（日本の四季＆関東と関西の違い）のppt資料を作成し、プレゼンテーションを行った。また、ディスカッションの時間帯には、“Positive / Negative impacts of COVID-19” のテーマで経済・教育・環境の3分野のグループに分かれてディスカッションを行った。

交流は午後4時頃から行われ、COVID-19による感染拡大を避けるために、9人を9教室に分けて参加させ、プレゼンテーションはグループ（2～3人ずつ）ごとの教室に分けて実施した。

本来は約1週間続く短期留学交流であり、渡航と招聘を合わせれば約2週間にわたって対面で交流できるはずである。生徒は、実施できたことに対しては嬉しさを感じていたが、満足感はもう一歩だったようである。しかし、オンラインによる交流後、お互いに連絡をとり合うことが可能であり、渡航が可能になってから再交流することが可能になっている。



参加者全体の交流写真（関西大学高等部及び教員を含む）



グループごとのプレゼンテーション実施(1)



グループごとのプレゼンテーション実施(2)

(4) 本年度中止になった国際交流・講演会

・UPEI 研修（プリンスエドワード島大学英語研修）

毎年、カナダ東部のプリンスエドワード島大学（カナダ東部）において、Summer English Program 研修に 16 名の生徒が参加している。この英語研修は、8 月中旬から下旬の 2 週間にわたって行われているが、COVID-19 の感染拡大の影響で中止となった。

直前の 5 月まで、両校で実施の可能性を探った。本校との時差が約 12 時間あり、オンラインによる研修のアイディアは両校から出なかった。しかし、筑波大学の学生が本年度末にオンラインでの研修を実施するという話を筑波大学の先生からお伺いした。2021 年度において、高校生がオンラインによる研修を受講できるかどうかについて検討してみたい。

・日本中国ティーンエイジアンバサダー

昨年度は中国北京市の景山高校との相互交流を行なった。イオンワンパーセントクラブ主催の大使活動として、経済的援助を受けて行われ、本年度は 12 回目となる予定だったが中止となった。度重なる日程変更により実施の可能性を探ったが、実施できなかったため、参加は 2021 年度に持ち越された。実施できた場合は招聘及び渡航によりホームステイを経験し、両国の高校生がお互いの学校の授業に参加し、両国の将来のリーダーが育つききっかけとなる交流である。2021 年度に実施できることを願っている。

・講演会（シンガポール・韓国）

シンガポールの後援会や韓国の講演会など、国際交流の前の学びの場を設けているが、2020 年度は残念ながら実施できなかった。特にシンガポールの講演会については、国際部すでにポスターを作成して完成しており、多くの生徒に学びの機会を与えたかったのであるが、臨時休校に入ったために中止となった。

2021 年度は、COVID-19 の感染拡大の影響で対面での講演会ができない場合は、各種講演会をオンラインで実施することを考え、多くの生徒が参加できるような募集方法を考えている。

2020年度国際交流プログラムにおける生徒の海外・相互交流での活躍

1. 本校の国際教育の特徴

本校における国際交流プログラムの目標は、中高6年間を通じて「トップリーダー形成の一助として、国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材の育成を図る」ことである。

この目標の下、本校の国際教育の特徴を上げるとすれば、以下のとおりである：本校はスーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）に指定されて第4期19年目であるが、このSSH事業の支援を受けた国際交流活動が本校の中心になる。その中で最大のものは、2009年より続いている、姉妹校の台中第一高級中学（以下、台中一中；なお、日本の高校に相当する）との研究交流である。SSHプログラムなので、理数系がテーマの研究文化交流という色合いが強いが、文系的内容でもしっかりとしたものであれば排除するわけではない。とはいえ、全体としては理数系テーマの生徒が発表の中心になるため、文系生徒がより参加しやすい国際交流事業として、筑波大学からの予算補助を得て2013年に開始した釜山国際高校との文化交流プログラムもあり、この台中・釜山との派遣交流が本校の国際交流活動の2つの柱となっている（両校とはこちらからの派遣ばかりでなく、本校への訪問の受け入れも行っており、相互交流ということができる）。そこに、他のSSH校との連携で行っている国際交流プログラムが加わる。また、大学からの支援による、放課後のイングリッシュ・ルームも健在である。

ところが、今年度は折からのコロナ禍が原因で、現地に赴いての研究交流はことごとく中止となり、一時はどうしたものかと思ったが、オンラインによる交流に活路を見出し、出来得る限りのプログラムを実践した。今回はその報告である。



台中一中とのオンライン交流（本校オープン・スペースにて。スクリーン上の台中一中生徒とともに）

2. 令和2年度活動報告

本校の国際交流プログラムは前述のように、本校単独で企画・実施する、台中一中及び釜山国際高校との交流事業と、他のSSH校の企画に、本校の生徒・引率教員が参加する2つの形態に分かれる。以下に、まず本校の企画を述べ、その後他のSSH校との企画について述べる。

(1) 台中第一高級中学（台中一中）

本校のSSH関連国際交流事業として2009年に始まり、今年度で12年目となる。当初は本校から先方への訪問のみであったが、2013年に台中一中の日本訪問旅行に合わせた本校訪問が実現し、本校では国際交流デーとして1日の特別スケジュールを組んで迎えた。以降隔年で本校訪問があり、昨年度は第4回目が行われた。本年度は台中の本校訪問ではなく、12月に本校から台中一中に訪問予定であった。しかし前述の通り、コロナ禍となり1学期は6月初めまで生徒の登校はなく、通常は5月末に行う募集はできず、また、研究交流は高2の課題研究での研究テーマをもとに12月に発表をしていたのであったが、その課題研究も1学期中に開催することはできなかった。つまり、研究交流をする見通しが立たなくなってしまったのである。12月になっても現地に派遣することも、おそらくできないことから、部分登校の始まった6月の後半には、オンライン交流という道に切り替えた。生徒には「9月に募集開始するから、自分が課題研究でテーマにする予定のものを準備しておくように」と指示を出した。

9月に入り、一斉登校となり課題研究も開始し、相手校と研究交流の見通しについてオンライン会議を行った。オンラインの半日開催、研究発表は各校4本づつ、それに学校紹介と文化交流を行う、ということになった。例年は研究発表を各校8本程度行っているので、規模は半分ということになった。応募する生徒も現地交流がないことからなかなか数が伸びなかつたが、何とか高2の研究交流4本に高1の学校紹介ができる態勢になった。

参加者が決まると、個々の研究チームごとに課題研究の担当教員が顧問となり研究を進めた。11月中旬にA4判2ページの英文アブストラクトを提出させ、「アブストラクト集」にまとめた。タイトルは以下の通り：

- 1 Body color change of aphids (biology)
- 2 An Area Formula of Convex Regions on Hyperbolic Plane (mathematics)
- 3 Light Attracts Daphnia (biology)
- 4 Educational inequalities that COVID-19 tells us (social science)

また、高校1年生は例年通り、学校紹介を行うことになった。

その後も2週間に1回程度先方とオンライン会議をして交流予定日に備えた。直前にはハード面のチェック（Google Meetで行うことになり、双方の画面や音声確認）も行った。

また、期末考査後に、Mr. and Ms. Vierhellerによるプレゼン講習を行い、12月11日、台中一中のオンライン研究交流を実施した。プログラムは以下の通り：

- 1 The date: December 11 (Fri)
- 2 The schedule (Japan Time)

9:00-9:30 Opening Ceremony (開会式)

Signing Ceremony for the renewal of our sister school relationship (姉妹校関係締結更新式)

Greetings (5 min x 2), Cultural Exchange program (8 min x 2) (挨拶と文化交流)

9:30-10:00 School introduction (15min x 2 : TKKM (筑駒) → TCFSH (台中)) (学校紹介)

10:00-10:05 Short Break (休憩)

10:05-11:05 first half of research study presentations (研究発表・前半)

(15 min x 4 : TK → TC → TK → TC)

11:05-11:10 Short Break (休憩)

11:10-12:10 Second half of research study presentations (研究発表・後半)

(15 min x 4 : TK → TC → TK → TC)
12:10-12:20 Q & A time (質疑応答)
12:20-12:40 Ending remarks (10 min x 2) (閉会の辞)

音声の問題などオンライン交流特有の問題はあったが、概ね、予定通りのペースで運営することができた。また、オンライン上で姉妹校締結の更新も行ったことを付け加えておく。



2020年度 姉妹校締結の様子

◎参加生徒の感想（得たものは何か）は以下の通り：

- ・自分の研究だったり思っていることだったりをこれからも発信していければなと思った。
- ・台中生の学術的な探求姿勢から刺激を受けた。
- ・まず、研究テーマについての理解が深められたこと、そして、英語を話す時の体の使い方を知ることが出来たこと。
- ・英語での説明やスライドで、わかりやすく印象的に内容を伝える方法。
- ・研究をまずは発表するスキル、そして伝えたいことを英語に転じる能力。

◎相手校である台中一中の発表については、以下のような感想であった：

- ・台中生の発表のクオリティの高さに驚いた。研究設備も本校より優れているが、ハイクオリティたらしめているのは研究に対する彼らの意欲だと思う。
- ・真っ先に思ったのは、様々な意味での規模の違いである。生物研究では実験の量、質がものをいうが、時間のかけ方、遠方に赴いての実地調査など本稿では難しいことを平気でやってのけている。



文化交流で英語落語を披露する

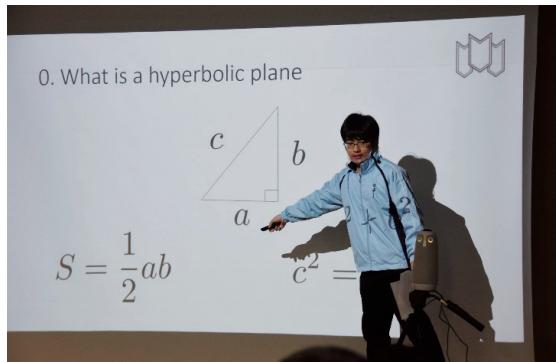


ユーフォニウムで日本の歌を演奏する

◎オンラインで行ったことについては：

- ・オンラインの発表でも何か問題になることはなかったが、強いて言えば、発表するときに通信機器のカメラに向かって話さなければならない点が普段と違いしゃべり方で苦痛を覚えた。

- ・オンラインという形態なので、普段と大きく異なる部分もあったが、例年はない学びもあったであろうと感じている。ただ全研究発表がそうであろうが、まず最も大事なのは研究内容であろう。
- ・全体を通して、研究交流会としては今回のオンラインの形で十分できると感じた。一方で文化的な交流や生徒同士の交流はなかなか難しく、事前に趣味などのアンケートなど実施し、それに基づくグループなどを作り歓談の時間などを設けるなどすべきだと思う。



数学の発表



生物（ミジンコ）の発表



生物（アブラムシ）の発表



コロナ禍の教育格差の発表



高1による学校紹介の様子



スクリーンの台中生と別れを告げる

まとめれば、初のオンライン交流であったが、研究発表を通じて、英語という媒体をとしてのスキル、効果的なプレゼン能力、台中生から受けた研究発表への姿勢という刺激など、例年のような学びを体験することができたことが感じられた。一方で、最後の生徒の感想にあったように、文化的な交流の面ではオンラインで行う上で難しい点があることも判明した。このあたり、来年度がどういう形になるかわからないが、クリアすべき課題と考える。

(2) 韓国・釜山国際高校

本校の国際交流事業のもう一つの柱であり、主に文系向けのプログラムとして、筑波大学からの教育長裁量経費による支援を受け、2013年より続いている。基本的に、釜山国際高校から本校訪問が1月に行われ、3月末に、本校生徒が釜山国際高校を訪問する、という相互交流を行っている。ただ、今年度はコロナ禍のため、現地交流はできず、またオンライン交流も実施することができなかつた。これは、釜山国際高生が例年本校を訪れるのは1月半ばで、実は韓国の旧暦の休暇期間を利用して訪れているので、オンラインで行おうとしても、生徒も教員も休暇中で実施は困難であったためである。

ただ、釜山国際高校は他の国々の学校とも海外交流が盛んで、例年11月初めにGlobal Forumを開催してきた。本校も例年招かれていたのであるが、生憎、本校はその時期文化祭の真っただ中で、毎年「残念ながら…」とお断りをしてきたのであった。ところが、今年度はこのForumもオンライン開催となり、本校が文化祭の時期でも物理的に参加が可能となり、3名の高2生が参加の意思を表明した。

Global Forumの実施内容は以下のとおりである：

- ・フォーラム期日：2020年11月5日
- ・メインテーマ：Post Pandemic Societies
- ・サブトピックス：Technology and Science, Education, Politics, Health, Economics
- ・プレゼン時間：10分以内

→原稿提出9月末日、プレゼン・ビデオクリップのサイトへのアップ10月25日

まさにコロナ禍ならではのテーマで、その中にさらにサブトピックがあり、本校の参加生徒はEducationを選択し、コロナ禍での下でオンライン授業などに潜む不平等・格差の問題を取り上げた。

◎研究発表評価および参加生徒の感想

参加校は主催の韓国はじめ、日本（3校）、ベトナム、ニュージーランド、台湾、インドネシア、スウェーデン、ロシアの8か国で、それぞれのサブトピックスに合わせて、サイトのコーナーに分かれ、ビデオクリップをアップし、Global Week中に、サイトにアクセスし動画を視聴しながら、わきのコメント欄にコメントや感想、意見を書いていく。また、釜山国際高校の生徒たちが評価もしたようであるが、特に順位というものがついたわけではなかった。本校生徒の、参加しての感想は以下の通り：

- ・どの発表も非常にレベルが高く、身振り手振りなども効果的で、自分もプレゼンの練習を積んでいかなければいけないと強く思われた。（動画なので）英語が聞き取れないところを何度も聞いたり、面白いと思ったことをすぐに調べられるのはとても良いと思った。



サイトにアクセスし、他校の動画を見る



釜山国際高校から届いた韓国伝統の玩具

- ・どんな形であれ他国と互いに発表しあうということは、学ぶことが本当に多いので、来年以降もオンラインでも参加を続けていければ良いと思う。

- ・Global Forum は事前に動画を撮影し、それを相互に見合うというオンデマンド形式だったため、スライドや音声を視聴者にとって見やすく、聞き取りやすくする工夫が事前にできた。
- ・韓国の高校生の発表動画では、実際に喋っている姿をスライド画面にクロマキー合成しており、より魅力的な発表に見えた。次回以降チャンスがあれば試してみたいと思う。

まとめれば、8か国という多数の参加だったので、内容もそうだが動画の形式も様々で、参加生徒はその両面で刺激を受けたことがよくわかる。動画なので発表の際に、取り直しや編集で完成形を送ることができ、また1度では聞き取れない英語も複数回見ることで理解が深まるというメリットもあるようだ。

ただ、「交流は、やはりテキストベースでは難しい部分もあり、テーマごとにオンライン会議サービスでリアルタイム交流ができればより深い学びができるかと思う」という意見もあり、それを補う一種の文通サイトである「STORY パルの使い方はよくわからないまま終わってしまった」との声もあった。参加国の時差もあるため、難しい部分はあると思うが、やはりライブでのやり取りがあれば、交流しているという実感も刺激も一層強くなったのではないかと、コンピュータの画面を眺めている生徒のわきにいた筆者も思った次第である。来年度の課題としたい。

(3) 名古屋大学付属高校 SSH プログラムへの参加

今年度、名古屋大学教育学部附属高等学校 SSH 重点枠企画「アメリカで数学をしませんか」に連携校として参加した。本校としての参加は2018年度に続き2回目となる。

この企画は、全国公募から1stステージ12チーム→2ndステージ8チーム→3rdステージ4チームが選抜されていくチーム対抗コンテスト型の企画で、3rdステージでは米国でのフィールドワーク、および数学的課題の協同解決が目標とされている。

同学年の全国の高校生とチーム対抗で競うことで、参加生徒の興味・関心をさらに喚起し、本校での数学課題研究の推進役にもなってくれることが期待できる。今年度は情勢の変化により、オンラインセッションによる開催進行となっているが、本校は幸いにも第3ステージまでクリアし、3月21日から24日まで名古屋大学附属高校にて米国チーム（North Carolina State University）大学生とのZoomによる対戦に参加することが決まっている。ここまで内容は数学的なものであり、国際交流とは異なるが、最終段階において米国チームと交流するとのことで、ここでも簡単に触れた次第である。

(4) 他の交流プログラムについて

例年であれば、国際学生サイエンス・フェア（International Students Science Fair）などに招待されたり、筑波大学外国人教員研修留学生との交流（本校の音楽祭や文化祭への訪問）も行われるのであるが、コロナ禍のため、本年度の実施は中止となった。

3. まとめ～生徒の変容などについて

以上、本校の国際交流の実践を紹介した。例年の本校の国際交流の特徴は、事前準備に相当時間をかけていることであったが、今年度はコロナ禍で、その準備もなかなか危ぶまれた。またオンラインという新しい媒体での研究交流であった。例年通りではないが、例年とは違った体験を通じて学びがあったことも事実である。卒業後、大学で海外留学をし、本格的な研究を行う者が多いことも海外との交流の成果であるが、それまでの自分への振り返り、ということも大いに意味を持つことであろう。

卒業後の生徒のアンケートを取ることも徐々に始めており、今後はその後の進路への影響なども研究していきたい。

（文責：研究部・国際交流担当 八宮孝夫）

コロナ禍でも WWL 拠点校として

1. 本校の国際教育の特徴

筑波大学附属坂戸高等学校（以下「本校」）では平成 20 年に校内の国際教育推進委員会（Committee of International Studies、以下「CIS」）を設置し、それ以来本校独自の取り組みである「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」、ブラジル、タイ、カナダ、台湾、インドネシアなど各国からの留学生の受け入れ、ユネスコスクールへの加盟、学校設定教科「国際」とその科目の設置、そして本校が主催する「高校生国際 ESD シンポジウム」などを通して、総合学科高校だからこそ可能である多角的な国際教育のあり方を模索しながら実践を積み重ねてきた。そして、これまでの本校の実践の成果をベースとして、平成 26 年から 5 年間、文部科学省のスーパーグローバルハイスクール校として、語学だけではなく、「グローバル社会において、自分自身は社会とどのようにかかわり、平和で持続可能な社会を実現するために何ができるか。」を生徒自身が考え、実践できることを重視したプログラムを展開してきた。

1946 年に地元の農業高校として発足してから 70 年、1994 年からは日本初発の総合学科高校のパイオニアとして 20 年以上歩みを重ね、平成 26 年度の SGH 指定後は、総合学科を生かしたグローバル社会におけるキャリア教育の実践を積み重ねている。2018 年 4 月には、国際バカロレア日本語 DP の 1 期生が入学した。1 期生が 3 年生になった本年度 DP 最終試験を迎えるにあたり、初年度から世界平均を上回るスコアで DP 取得者を出すことができた。

本年度、コロナ禍で WWL（ワールドワイドラーニング）コンソーシアム構築支援事業の拠点校として、何ができるか、大変困難な 1 年となった。そのような中においても、これまでの連携先からの変わらぬ支援や新たな連携先からの支援をいただき、新たな取り組みにもチャレンジすることができた。ここでは、WWL 事業について拠点校の視点からまとめるとともに、本年度あらたに開催した The 2nd SDGs Global Engagement Conference online version やアジア学院でのフィールドワークを中心に報告する。

The 9th High School Students' International ESD Symposium
On line version 2020
&
The 2nd SDGs
Global Engagement Conference

October 31, 2020
9:50 – 12:30
@ wherever you are

Senior High School at Sakado, University of Tsukuba
筑波大学附属坂戸高等学校



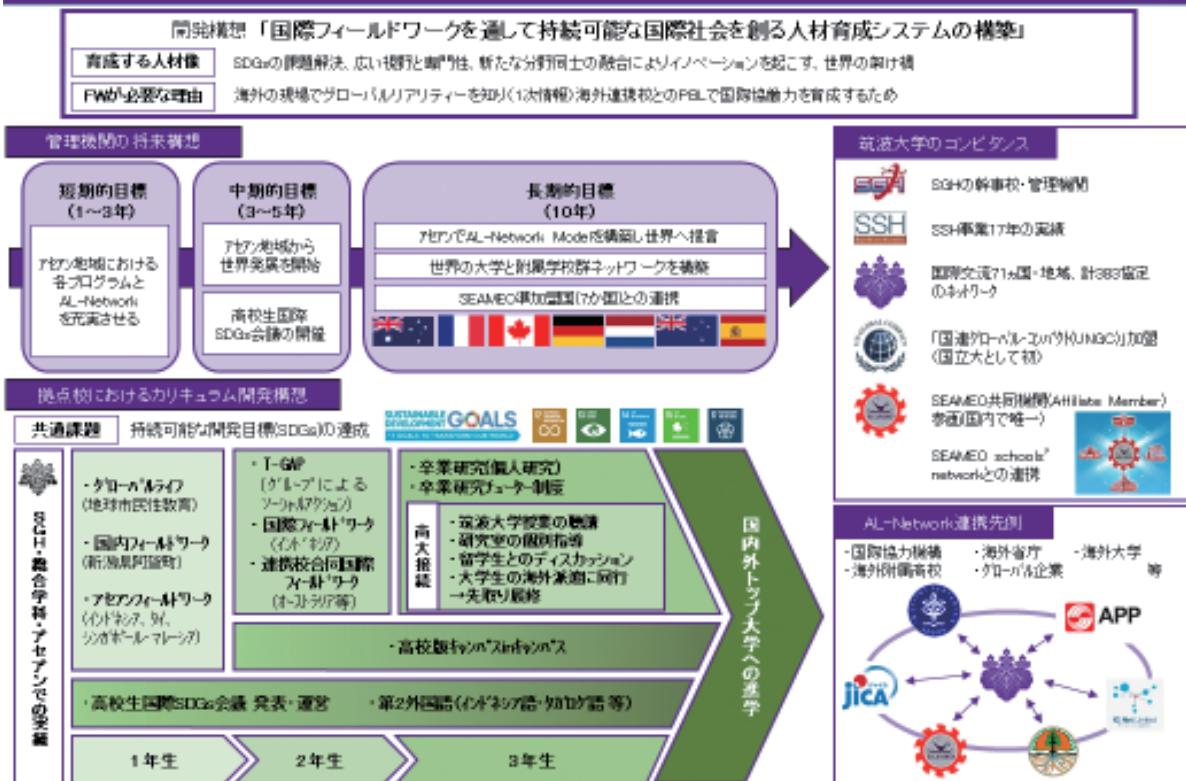
第 9 回高校生国際 ESD シンポジウム
The 2st SDGs Global Engagement Conference
On Line version 2020
SDG を軸に、海外 7 校、国内 6 校が参加
(2020 年 10 月 31 日、オンラインで実施)

2. 2020年度のWWL事業について（拠点校の視点から）

WWL事業は、SGH事業の後継事業に位置付けられている。これまでのSGH事業と大きく異なる点は、学校を指定するのではなく、管理機関を指定し、そこに拠点校、そしてコンソーシアムによりさらに共同実施校、連携校を置くことである。WWL事業で各コンソーシアムにおいて求められている主なものとして、1) グローバル人材育成のためのカリキュラム開発（社会課題を掲げたPBL）、2) 高校生が主体となった国際会議の開催、3) 高大接続による高度な学習機会の提供、4) 教師教育等があげられている。1)については、すべてのフィールドワークが中止となったが、2020年11月にコロナ禍においても実施できるプログラムとして、栃木県にあるアジア学院の協力により、国内版国際フィールドワークを実施することができた。2)については、後述するようにこれまで開催してきたシンポジウムのネットワークを活かし、大学、海外校、企業によりオンラインで実施した。3)については、大学と引き続き協議をすすめている。4)の教師教育は、昨年度受け入れた、SEAMEOのプログラムである、SEA-Teacherプログラムは中止となったが、あらたにオンラインによる教育実習も模索されている。来年度以降の展開をきたいしたい。また、SEAMEO（東南アジア教育大臣機構）のAffiliate memberに筑波大学がなっており、その一環で、本校も筑波大学と合わせSchool Networkへの加盟が認められた。日本では、はじめての加盟である。

SEAMEOのネットワークにより、昨年度の取り組みでは、 ASEANの学生の皆さん の教育実習中に英語科の授業だけではなく、理科では各国の環境問題について公民では現代社会について英語で授業を実施してもらった。また、本校で実施している総合学科研究大会でもプレゼンを実施してもらった。このように、実質的な高大連携を進めていければ、WWL事業で掲げられているグローバル人材育成のためのカリキュラム開発、国際会議、教師教育そしてそのベースとなる各国とのネットワーキングなど、様々な波及効果があると思われる。コロナ禍においても、WWLを活かした海外との連携をすすめていきたい。

筑波大学WWL(ワールドワイドラーニング)コンソーシアム構想概要



3. The 2nd SDGs Global Engagement Conference On line version について

2012年度から本校では、高校生国際ESDシンポジウムを開催しており今年で9回目となった。SGH指定期間中は、これとあわせて全国SGH校生徒成果発表会を実施していたが、WWL指定後から、The SDGs Global Engagement Conference Tokyoとし、WWLで掲げているSDGsに関する国際会議として開催している。

今回のシンポジウムのあらたな取り組みとして、オンラインでの国際会議の開催に挑戦した。オンラインでの開催で改めて感じたことは、これまでの連携先との信頼関係の大切さだ。はじめての開催であり、戸惑うことも多く、事前の打ち合わせも不十分なところもあったが、多くの支援をいただき無事、開催することができた。最終的に、オンラインの利点を生かし、海外校からの参加は昨年度を上回り、筑波大学の附属学校群からの参加もあった。これまでのネットワーク、新たなネットワーク、オンラインの利点、対面の利点などを整理しながら、来年度、10回目を迎えるシンポジウムの在り方を検討したい。

Program																					
(Starts at 9:50)																					
Opening Address																					
Yuji MORO (Vice President, University of Tsukuba)																					
Congratulatory Address																					
Ir. Tri Heru Widarto. M, Sc (Pincipal. Labschool SMA Kornita, Bogor Agricultural University)																					

Opening Session																					
Daiki AYUHA, Sabita PRADIGDO (Senior High School at Sakado, University of Tsukuba)																					
Keynote speech																					
Masahisa SATO (Professor, Graduate School of Environmental and Information Studies, Tokyo City University)																					

⑤ Section Meeting (10:45-12:00)																					
<table border="1"><thead><tr><th>Section Number</th><th>Title</th></tr></thead><tbody><tr><td>Section 1</td><td>Ethical Consumption</td></tr><tr><td>Section 2</td><td>Changes in Asia, offered in English</td></tr><tr><td>Section 3</td><td>Fieldwork facilitated by UTSS alumni</td></tr><tr><td>Section 4-A</td><td>Oral presentations in English</td></tr><tr><td>Section 4-B</td><td>Oral presentations in English</td></tr><tr><td>Section 4-C</td><td>Oral presentations in Japanese</td></tr><tr><td>Section 4-D</td><td>Special session (Agriculture and Sustainability)</td></tr><tr><td>Section 4 E</td><td>Special session (T-GAP)</td></tr><tr><td>Section 5</td><td>1D session facilitated by IC-NET limited.</td></tr></tbody></table>		Section Number	Title	Section 1	Ethical Consumption	Section 2	Changes in Asia, offered in English	Section 3	Fieldwork facilitated by UTSS alumni	Section 4-A	Oral presentations in English	Section 4-B	Oral presentations in English	Section 4-C	Oral presentations in Japanese	Section 4-D	Special session (Agriculture and Sustainability)	Section 4 E	Special session (T-GAP)	Section 5	1D session facilitated by IC-NET limited.
Section Number	Title																				
Section 1	Ethical Consumption																				
Section 2	Changes in Asia, offered in English																				
Section 3	Fieldwork facilitated by UTSS alumni																				
Section 4-A	Oral presentations in English																				
Section 4-B	Oral presentations in English																				
Section 4-C	Oral presentations in Japanese																				
Section 4-D	Special session (Agriculture and Sustainability)																				
Section 4 E	Special session (T-GAP)																				
Section 5	1D session facilitated by IC-NET limited.																				

Review																					
Nakao NOMURA (Associate Professor, University of Tsukuba)																					
Closing Session																					
Daiki AYUHA, Sabita PRADIGDO (Senior High School at Sakado, University of Tsukuba)																					
(Ends at 12:30)																					

本年度のシンポジウムのプログラム

4. アジア学院における“国内版”国際フィールドワーク

アジア学院は、1973年に創立され、アジア、アフリカ、太平洋諸国の農村地域から、その土地に根を張り、その土地の人々と共に働く“草の根”の農村指導者（Rural Leader）を学生として招き、栃木県西那須野のキャンパスにて、国籍、宗教、民族、習慣、価値観等の違いを認めつつ、公正で平和な社会実現のために、実践的な学びを行っている学校である。9ヶ月間の農村指導者養成の研修は、いのちを支える「たべもの」作りにこだわり、有機農業による自給自足を基本としています。学生たちは座学、ディスカッション、見学研修、グループ単位での農場運営を通して、自国のコミュニティの自立を導くリーダーシップを養っている（<http://www.ari-edu.org/about-us/> より）。

コロナ禍においても、国内で海外の人たちと共に学べる場所を模索していたところ、本校の卒業生とのつながりの中で、このアジア学院において国際フィールドワークを試行することができた。2020年11月21日から23日の2泊3日に11名という人数で、コロナ対策に常に配慮しながらの活動であった。学院では、人々が最も大切にしているいかなければならない、「食」「いのち」をベースに、持続可能で平和な世界を創っていく、まさにSDGsに通底する学びを実現することができた。来年度以降も、継続的に連携を依頼しているところである。



アジア学院における国内版国際フィールドワークの様子（2020年11月21日～23日）
(左：野外でのワークショップの様子 右：インドネシア人研修生からの講話)

5. 上記以外のおもな国際教育活動例一覧

国際連携協定校 ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校とのオンライン交流会（2020年7月）
SGH・WWLインドネシア国際FWに参加した卒業生の自主企画による2国間連携ワークショップ（5回）
WWL連携企業：IC-NET株式会社との連携によるコロナ禍におけるオンライン授業の開発（2020年9月）
WWL連携企業：APPJ社との連携による、エシカル認証商品の開発Mtgへの参画
SEAMEO Schools' networkへの加盟（2020年11月10日）
JICA元ボツワナ支所長による国際講話

6. 生徒の変容について

SGHおよびWWLでは、生徒の長期的な変容の把握を求められている。本年度、SGH1期生が国際機関に内定した。海外で勤務を始めた卒業生、アセアンの大学院へ留学の準備を進めている卒業生も出ている。2014年に掲げた目標が確実に実現しつつある。

（文責：建元喜寿）

グローバル社会で活躍する視覚障害当事者の育成を目指して

1. 本校の国際教育の特徴

2020年度の本校における国際教育については、COVID-19感染拡大予防のため、予定していた計画を十分に実施することはできなかった。しかし、オンライン会議システムを活用する等の工夫を行い、いくつかの活動については実施することができた。中でも、高等部生徒有志が初めて出席したタイ視覚障害者支援クリスチャン財団傘下の学校に通う視覚障害生徒とのオンライン交流は、国際交流協定締結初年度の具体的な交流として、双方にとって、大きな第一歩となった。2021年度も生徒のオンライン交流を続ける他、音楽交流や教員間での教材や指導法の交流も検討していく予定である。

本紙では、高等部におけるタイとの交流の他、トビタテ！留学JAPANへの取り組み、高等部専攻科におけるインドの視覚障害者の職業支援や留学生受け入れ事業等について紹介する。これら以外にも、高等部国際交流部におけるハンズオン東京のボランティアとのオンライン交流、青年海外協力隊に参加したことがある教員によるタンザニアの文化についての講話、西町インターナショナルスクールの生徒とのオンライン交流、高等部専攻科留学生と小学部児童との交流を実施している。留学生と小学部児童との交流については執筆時点後の実施のため、残念ではあるが詳細を紹介することができない。

2021年度も感染症への対策のため十分な活動はできないと思われるが、上記の活動を継続・発展させながら、視覚特別支援学校のナショナルセンターとして、また視覚障害教育専門機関としての国際的な役割を担うセンターとして、そしてグローバル社会で活躍する視覚障害当事者の育成を目指し、国際教育活動を推進していきたい。

(文責：青松利明)

2. 生徒同士のオンラインによる交流会について

本校は、2020年にタイ視覚障害者支援クリスチャン財団（以下、CFBT）及び管理下の盲学校と国際交流協定を締結し、本年度はオンラインによる連携を進めている。今回は、2021年2月23日（火）に実施した、生徒同士のオンライン交流会について報告する。

○ CFBT コンケン職業訓練校（情報科、音楽科の職業課程の学校）生徒5名と本校高等部生徒7名
本オンライン交流会では、本校卒業生の堀内佳美氏、CFBTで日本語教師の Sarawut Kaewsan 氏に日本語・タイ語の通訳をお願いした。

交流会本番では参加生徒の自己紹介からスタートし、次に事前に両校で話し合って決めていた2つのテーマについて発表とディスカッションを行った。（以下は、生徒たちが発表した副題）

テーマ1：視覚障害者への支援と補助具や支援機器について

日本側

- ・点字ディスプレイ（PCと接続し、画面上の文字を点字で表示できるもの）
- ・スクリーンリーダ（音声読み上げソフト）PC-Talkerの活用
- ・見えにくさを補うアプリ（弱視生徒が活用している「みえる丸」）
- ・視覚障害生徒への学習・生活上の配慮

タイ側

- ・タイの視覚障害者が使う支援機器の実際
- ・視覚障害児者の歩行、支援と生活

テーマ2：文化と暮らしについて

日本側

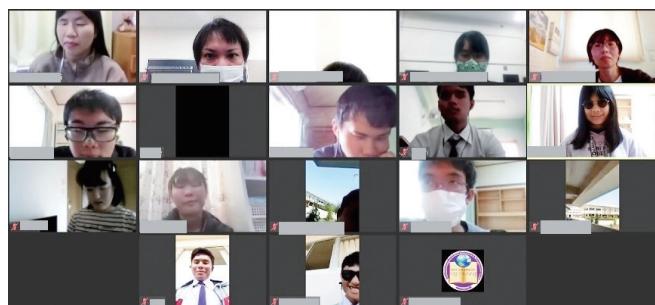
- ・日本の行事（お正月、節分、桃の節句と端午の節句）
- ・日本の季節（4つの季節の違いとその文化）
- ・季節の風習と食べ物

タイ側

- ・タイの有名な食べ物（タイに留学したら食べてほしいもの）
- ・タイの行事（伝統的なお祭り「ロイクラトン祭り」の様子など）

以下は、交流会に参加した本校生徒の感想である。（　）内は生徒氏名をイニシャルで示している。

- ① 私が特に印象に残っていることは、タイではリンクポケット（録音図書の再生とインターネットでの録音図書検索ができる装置）のような機械があり、PDFファイルやワードの文書も見ることができるそうなので、タイで実際に見てみたい。（K.Y.さん）
- ② タイでは、日本と比較してインフラが十分ではないことがわかった。一方で、日本の視覚障害者が使っているICT機器とは異なるものが、随分と発展していると感じた。発表や自己紹介は、とても緊張したが、楽しい時間を過ごせた。（A.S.さん）
- ③ タイでは、季節が3つに分かれることがわかり、また日本とタイの補助具や支援機器の違いについて意見交換ができ、新たな発見がたくさんあり、面白かった。（S.A.さん）
- ④ 私はタイとの交流会に参加して、タイのICTの普及や歩道などの環境の違いを知ることができた。タイ生徒からの質問の中で、日本ではどのようにして全盲の方が単独で外出しているのか？などの具体的な質問に答えることができた一方で、タイでは点字ブロックの普及が街中であまり見られないといった点について、タイの生徒たちと話を進めていく上で理解できた。（K.K.さん）
- ⑤ タイの支援技術や文化について知ることができ、とても勉強になった。特に、年中行事などは日本と共通する部分があることに驚いた。次回は、お互いの国での授業の様子や、視覚障害者への配慮がどのようにされているのかなどを共有したいと思った。（S.T.さん）
- ⑥ もっとタイの生徒の話を聞きたい。また、通訳者の堀内さんと初めて会ったが、先輩の海外で働く姿に憧れた。次回は堀内さんのお話も聞いてみたい。長時間、日本語以外の言語に触れられたことが、とても新鮮な気持ちになれた。（S.Y.さん）
- ⑦ 私は今回の交流会で、タイと交流するとともに、異文化（日本以外の国の言語や文化）に触れられ、有意義な時間を過ごせた。具体的に、タイにも日本の「サピエ図書館」のようなシステムがあることを知り、驚いた。また、障害生徒のICT活用への理解について、日本はまだまだ課題があることをタイの生徒たちと話をしていくことで、改めて感じた。（Y.M.さん）



(写真1) 自己紹介の様子



(写真2) 支援機器について本校生徒が発表



(写真3) オンライン交流会 集合写真

(文責：佐藤北斗)

3. トビタテ！留学 JAPAN でタイ留学を目指す

高等部では、トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム（以下、トビタテ）の制度を活用し、生徒が短期留学を果たしている。トビタテ高校生コースとは、将来世界で活躍したい、日本から世界に貢献したいと熱望する、意欲高い高校生の留学を高等学校段階から文部科学省が支援する制度である。

2016年度と2017年度（トビタテ高校生コース第2期・第3期）では、チェコ共和国に6名の生徒が留学、2018年度と2019年度（第4期・第5期）では、タイ王国に5名の生徒が留学した。（2020年度はCOVID-19によりプログラムが中止となった。）そして2021年度（第7期）は7名の生徒が応募し、タイ留学を目指して取り組んでいる。

本校の生徒が継続してトビタテに合格し、留学できているのには、先輩のトビタテ生が後輩のトビタテ生を育てていく仕組みにある。本校では、トビタテで留学した先輩生徒が、私たち教員と共に次の世代のトビタテを目指す後輩たちを育てている。1次選考の書類の書き方をアドバイスしたり、2次選考のプレゼンテーションと面接試験に向けて面接官役として、何度も指導したりする。またトビタテに合格後も、留学に向けて、短い留学期間の中で何ができるのか、どういった目標を持って留学すると良いかなどを先輩としてアドバイスする。このことが、後輩生徒たちのトビタテでの留学を成功に導くことができている。

本年度も、1次の書類選考に向けて、後輩生徒たちがA4で10ページ以上となる資料を作成するにあたり、留学目標や目的、留学先で何がしたいか、留学から帰ってきた後に留学をどう活かすのかなどのキーワードを、先輩生徒がオンライン会議システムを用いながら考えさせ、説得力と熱意が伝わる文章になるよう、何度も何度もアドバイスしていた。トビタテ生は、エヴァンジェリスト活動（留学後に自身の留学を周囲に広める活動）に取り組むことが、トビタテの採用条件でもある。上記の活動は、エヴァンジェリストとして、本校のトビタテ生が一番大切にして取り組んでいることである。

(文責：佐藤北斗)

4. 高等部専攻科

① インド共和国視覚障害者に対する職業教育支援

専攻科鍼灸手技療法科で行っている「インド共和国視覚障害者に対する職業教育支援」事業に関し、例年通りインドの日本式あん摩教育モデル校（インド共和国立視覚障害者施設 NIEPVD: National Institute for the Empowerment of Persons with Visual Disabilities, Ministry of Social Justice and Empowerment, Government of India）、及びインド盲人連合（BPA: Blind People's

Association) と継続的に連絡を取り、COVID-19 祛にあって両校の活動が座学のみに関してリモートで実施されていること、NIEPVD に関してはインド共和国法改正にあって、カリキュラム等整備のため当校のあん摩教育に関する生徒受け入れが一時的に停止中であったが、再開に向けて動き出していることを確認の上、両校の昨年度卒業生に対する修了証発行作業（NIVH が 11 人、BPA が 10 人）を行った。修了証の送付に当っては、COVID-19 祛のため日本からの国際郵便（EMS 等）がインドへの配達を停止していることから、PDF ファイルを電子メールで送信すると共に、インド総領事館に問い合わせて方策を模索中である。

② インド総領事館への情報提供

9月上旬、インド総領事館からの問い合わせに応じ、専攻科鍼灸手技療法科が従来行ってきた留学生受け入れ事業、及び 2013 年～ 2015 年に JICA 草の根事業として行った「インド共和国視覚障害者に対する職業教育支援」、並びにその実施担当者（寺崎）に関して情報提供を行った。

③ 留学生受け入れ事業

現在鍼灸手技療法科では、留学生受け入れ事業において、アジアからの 3 人の留学生（ミャンマー、台湾、スーダン）を受け入れ、日本人のクラスと並行して日本語での鍼灸手技療法教育を行っている。留学生の言語的不利への配慮として、日本人とは別の「留学生クラス」を特設し、留学生が言語に関する質問等で他の日本人生徒に気兼ねせず、自分のペースで学習できる環境を提供している。来年度入学予定のキルギスからの留学生に関しては、今年度も 3 月 1 日より 3 日間、毎年恒例の「入学前指導」を実施し、寄宿舎での生活や、授業見学等、自国と異なる生活、学習環境を体験し、春休みを入学準備のために有効に使えるよう促す。

3 月 11 日には、毎年恒例の小学部児童と留学生との交流会を行う予定である。本校小学部の生徒にアジアからの留学生が、民話、歌、などの自国の文化を紹介したり、民族衣装の気付けを体験させたりするなど、異文化に触れる機会を提供する（本年度は COVID-19 感染防止のため、身体的接触等は控える予定）。

（文責：寺崎 直）

互いの文化を知り、学びを深める新しいスタイルの国際交流活動

1. 本校の国際教育の特徴

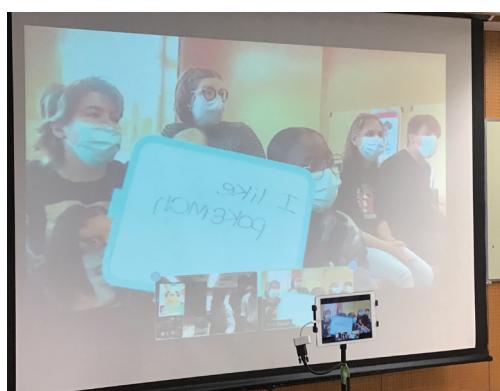
筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下「本校」）における国際教育推進事業の目的は、海外の聾学校（フランス・韓国・台湾）との生徒相互訪問交流、オンライン交流、海外企業との連携、海外からの来校者を積極的に受け入れることを通じ、国際的資質を育て、これからの中の国際社会に通用するグローバル人材の育成を目指している。さらに、本校生徒が国際教育推進事業の経験により、聴覚障害者の中や地域社会や職場で広い視野に立ち、活躍していくことを目指している。

2. 高等部普通科の交流

フランス国立パリ聾学校（Institut National de Jeunes Sourds de Paris：以下、パリ聾学校）との交流は、平成15年の姉妹校協定の締結から始まり、オンライン交流は平成25年より行っている。平成25年のオンライン交流は、本校からパリ聾学校への最初の訪問時に、本校寄宿舎との間で行われた。本校寄宿舎には高等部普通科の生徒も数多く在籍していたが、通学生はこの交流には参加できなかったため、平成28年からは放課後の時間を利用してオンライン交流を行った。その結果、異文化理解やコミュニケーション能力の向上など、オンライン交流を活用した国際交流の効果が示唆された。令和元年度は3回のオンライン交流を実施した。本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止による休校があり、放課後の活動が可能になったのは7月以降となった。9月はパリ聾学校の学年の進級時期であったため、11月以降にオンライン交流を2回実施した。それぞれ希望者を募り、第1回15名、第2回14名が参加した。以下、オンライン交流の様子や成果を報告する。

（1）事前準備

令和2年度のオンライン交流は、オンライン会議アプリを使用して、2学期に2回（11月20日、12月18日）実施した。第1回の交流では、パリ聾学校の生徒と初めてコミュニケーションを図り、お互いを知ることを目的にしたため事前準備を2回とした。第2回の交流では、第1回の交流で発表できなかったグループが前回の反省をもとにプレゼンテーションを作成し直し、発表、交流を行った。事前準備としては、交流に向けて、動画を使用ながらフランス手話の挨拶“Merci”、“Bonjour”等を練習した。また高等部1年生の参加者13名は3グループに分かれ、それぞれ、日本の「映画・アニメ」「サムライ・ゲーム・アイドル」「食文化」のプレゼンテーションを作ることにした。



(2) 活動報告

① オンライン交流（第1回 11月10日、第2回 12月18日）

第1回の交流では、本校生徒が2グループ、パリ聾学校の生徒が2グループ、それぞれ発表を行った。最初に、本校生徒からフランス手話での挨拶を交えながら、「日本の食文化と食文化のマナー」について発表をした。このグループはお椀とお箸を持参して、スライド発表後には、和食の食事のマナーを実演した。

次にパリ聾学校の生徒が、「パリの食文化」についてスライドを用いて発表を行った。今回はオンライン会議アプリを使用したので、パリ聾学校教員からパリ聾学校で2回線を使用する提案があった。本校、パリ聾学校教員とパリ聾学校生徒発表の3グループの表示となったことで、発表者がスライドを直接表示しながらも、パリ聾学校の教員の回線を使って手話で話しかけることが可能となつた。本校生徒がフランスの食文化に興味をもち、紙にペンで書いて、パリ聾学校の生徒に質問する姿が見られた。



第2回の交流では、パリ聾学校の教員からパリの状況に関して説明があった。フランス省庁からの要請を受けて、パリ聾学校では火曜日・金曜日の生徒の登校は家庭の判断に委ねられているので、何人の生徒が登校するかわからない状況だとのことであった。その後、パリ聾学校教員はタブレットを持ち運び、中庭や寄宿舎・食堂等パリ聾学校の校舎を案内してくれた。パリ聾学校の生徒が登校するまで、パリ聾学校の教員がフランス手話について説明してくれた。そして、パリ聾学校の生徒が数名登校し、交流に参加し、本校生徒が「日本の映画・アニメ」のスライドを説明した。最後は、自由に会話することになった。“What do you do in winter vacation?” “When will your winter vacation start?”など、休暇に関する会話が筆談や身振り手振りで行われ、交流は終了した。

② まとめ

オンライン交流実施後に、生徒に感想を提出させるとともに質問紙調査を行った。生徒からは、「パリ聾学校からの質問に、皆で試行錯誤しながら答えを書き示すことができ、意思疎通ができる楽しかった」「パリ聾学校の校内の様子を知ることができて良かった。学校が古い城のような雰囲気で、文化の違いを感じた」「英語を勉強するためのモチベーションにつながった」「日本とフランスの手話の違いに驚いた」のような感想が出された。生徒の感想や交流の様子、質問紙調査などから、異文化理解、コミュニケーション能力や国際交流に対する意欲の向上など、オンライン交流を活用した国際交流の効果が示唆された。また、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、お互いの訪問交流ができない中でのオンライン交流の重要性も感じることができた。来年度も計画的にオンライン交流を実施するとともに、オンライン会議アプリを活用した効果的な交流について検討ていきたい。

(文責：澤口真弓、田万幸子、久川浩太郎)

3. 高等部専攻科の交流

(1) はじめに

専攻科造形芸術科、ビジネス情報科（以下二科）では平成26年より隔年で台湾への研修旅行を実施している。令和最初の研修旅行は令和2年度に予定されていた。研修計画のひとつには造形芸術科の生徒たちによる、臺北市立啓聾學校への3回目の訪問も含まれていた。前回の訪問時には事前に制作したグリーティングカードを臺北校の生徒に披露して感想をその場で聞いたり、アドバイスをもらったりするなど生徒同士がデザイン作品を通じて交流を深める機会を得ることができた。臺北校の生徒たちとの交流は、日本のアニメなどを通じて日本を身近に感じていることもあるためか、予想していたよりも活発な意見交換がなされ、有意義な時間を過ごすことができた。こうした経緯があり、今回はさらに日本と台湾の文化について学習をすすめたことにより、生徒の表現形式も一層の工夫がほどこされつつあった。しかし今般の新型コロナウイルス感染症拡大とともに国内外の移動の制限により、残念ながら訪台することができなくなった。二科の年間計画の中で台湾研修旅行の時期は、12月の2週目の4日間としており、計画立案は前年度の2月中旬頃から始めることを常としていた。最初の緊急事態宣言にともなう一斉休校措置の間も旅行会社の方と調整を重ね、旅行の実現に向けた情報収集を行った。国内外に関わらず、研修旅行の計画は事前の準備期間が早期であるため、世界的な感染拡大の動向を読み切れない難しさがあった。そうしたことから3回目の研修旅行については他の行事と同様見送らざるを得なかった。旅行中止を臺北校と臺南校（平成26年度訪問）に伝えると同時に、両校と生徒作品を通じた交流をすることを確認した。臺南校については2020年12月に創立130周年を迎えるにあたり、交流をしている学校からの作品やメッセージの送付を希望する旨の返事があった。



生徒作品①グリーティングカード「花札」



生徒作品②グリーティングカード「タピオカミルクティー」

(2) 交流の実際

作品交流は今年度の「造形芸術科卒展」の会期中に同会場内にて展示することを目標に、作品画像のデータをやりとりすることで話をすすめてきた。またこれとは別に臺南、臺北に向かって実物の作品を送ることを計画した。両校に直接訪問ができないことに代わるメッセージをグリーティングカードとともに送付しようとする取組である。生徒たちは事前に伝えたい内容を熟考し、英文での手紙を作成した。これらは英語科の教員の協力を得て教科を横断した活動となった。また、国外に向けて物品を郵送する経験も初めてであり、梱包の際にも「この荷物が外国に行くんだ」という期待感をもって取り組む様子が見られた。10月の初め頃、校長挨拶と作品、手紙や学校グッズ、日本のお菓子などを詰め合わせた品を郵送した後、程なくして両校よりお礼の連絡をいただいた。臺南校からの連絡には学校のホームページに掲載する際の許諾依頼と先方が受け取った品々の画像が添付されていた。温かいお礼の文章は早速翻訳を行い生徒に伝えた。また、臺南校は12月の創立記念において、前述のように学校内外から寄せられた作品の展示を行い、そちらに本校生徒の作品も参加させていただくこ

とができた。この作品はオンラインストレージを利用してデータ交換を行っているため、実際の作品を完全に再現することは難しいが、日台双方の学校の設備や器機を活用して、プロジェクターによる映像紹介をしたり、拡大印刷の後に額装をしたりするなど、展示方法を工夫している。さらに作品の一覧表にはタイトルの日本語と中国語の表記を添えることで、鑑賞の際の補助となるようにしている。



生徒英文の手紙



生徒の梱包作業の様子



臺南校 Facebook 記事



臺南校展示風景全体



臺南校展示風景本校生徒作品

(3) 生徒の変容について

台湾への訪問を期待していたこともあり、研修旅行が中止になった当初は生徒にとっては少なからずショックが大きいようであった。積み重ねて来た学習に対する生徒の意識を別な方向に変えていくことは、指導する側にとっても容易ではない。しかし、作品を届ける対象を考え、気持ちを言葉や文章で表す活動が加わることで、制作活動の先にいる受け手の存在を、より強く意識できるようになったと思われる。同じような困難を抱えた他者のことを想像して思いやる気持ちをもつことは、国際理解の学習に限らず学校教育では大変重要なことである。実際の訪問こそ実現しなかったものの、台湾に是非行ってみたいという興味関心は生徒の中に確実に高まったようである。

(4) 今後の課題について

国内外の移動の制限が依然としてある中、学校現場のみならず社会においても従来の活動を見直さざるを得ない状況になっている。前述の卒展についても二度目の緊急事態宣言に伴い、展示会場が休館したことにより、校内展示に変更して実施する予定である。各附属学校の学習成果の発表がWEB上で行われるなど、様々な工夫が凝らされていることに倣い、持てる手段を最大限用いて発信を行っていきたい。多くの人がなかなか思うようにいかない状況であるからこそ、協力して新しい活動が創造できることを生徒に示していきたいと思う。

(文責：青柳泰生)

附属大塚特別支援学校の国際教育の取り組み

1. 本校の国際教育の特徴

附属大塚特別支援学校における教育拠点構想の1つである「国際教育拠点」の目的は、諸外国と連携して共に学び合い、互いの教育力を高めることである。

昨年度は、インドネシア共和国チバガンディ特別支援学校とのより活発な教員間交流を可能にするため、学校同士をインターネット回線で結んだWeb会議での教育研究交流を行った。この実践をさらに発展させるために、今年度は、オンライン環境を整備し、年間を通じた交流の機会をより多く計画していた。

しかし、3月以降、世界を席巻したCOVID-19感染拡大により、交流時期が定まらず苦慮することとなった。そこで、時期や時間の制約を受けずに実施可能なオンデマンドによる交流に計画を切り替え、コロナ禍における国際教育のオンライン用学習ビデオ（日本語版と英語版）を制作することとした。

国際教育の学習活動としては、2021年に開催予定である東京オリンピック・パラリンピックに向けた全校による国際教育イベント「大塚オリパラデー2020」の開催、幼児児童生徒の個別の教育的ニーズに応じたALT（外国語指導助手）による集団での英語学習、インドネシア共和国チバガンディ特別支援学校とオンラインでの国際教育研究交流など幅広く教育活動を行い、国際教育を推進することとした。

2. 全校による国際教育イベント「大塚オリパラデー2020」の開催

本校では2016年度より、オリンピック・パラリンピックを学校の重点プロジェクトとして位置づけ、幼稚部から高等部までの全校を挙げて取り組んでいる。今年度は、COVID-19感染予防対策として、各学級に大型モニターを設置するなど視聴環境を整備し、スライドや動画をZOOMで共有しながら行うオンライン学習による「大塚オリパラデー2020」を全4回（9月、10月、11月、12月）開催した。



第1回は、「オリンピック・パラリンピックについて知ろう」をテーマに、「オリンピアンからのビデオメッセージ」や、ステイックバルーンを使った「東京五輪音頭（大塚バージョン）」「ファイトの歌」のオンライン学習を行った。学習内容としては、東京都が制作した女子卓球の伊藤美誠選手からのコロナ禍の子どもたちへの応援メッセージ動画やオンライン学習用に制作した子どもたちが模倣しやすいオリジナルの振り付けの師範ビデオ、応援練習で使う五輪の輪をイメージした5色のステイックバルーンのデコレーションの仕方の解説ビデオなどを動画配信した。各学級で取り組む際にも、師範ビデオが大変役に立ったという感想が各学級の担任から寄せられた。



第2回は、「アダプテッドスポーツ体験」をテーマに、「カローリング」「ビーンボウリング」「ドッヂビー」の楽しみ方のオンライン学習を行った。学習内容としては、オンライン学習用に制作した用具の使い方やルール説明、練習や競技方法の師範ビデオを動画配信し、各学級が体育の授業で取り組めるよう紹介した。幼児児童生徒は、それぞれのスポーツに興味を示し、各学級で取り組む際にも事前の授業で師範ビデオが活用された。



第3回は、「日本文化を知ろう」をテーマに、お茶の水折り紙会館から講師を迎えて、「折り紙で作ろう！（家、乗り物、動物、腕時計、ハート）」のオンライン学習を行った。学習内容としては、最初に講師が実際に折り紙を折る制作場面をZOOMで視聴し、次にオンライン学習用に制作した折り紙の師範ビデオを各学級のタブレットで見ながら、子どもたちがそれぞれ作ってみたい折り紙の作品づくりに取り組んだ。子どもたちは、ビデオを静止させたり、巻き戻したりするなどして、自分の興味や理解に合わせて学習することができた。また本学習で取り組んだハートの折り紙で五輪のモニュメントを全校で制作した。



第4回は、「オリンピアン、パラリンピアンと勝負しよう！」をテーマにミライの体育館（大型プロジェクターで床面に映像を映し出すことができる体育館）を使って、実際の陸上選手や水泳選手、走り幅跳びの選手が走ったり泳いだりするスピードや跳んだりする感覚を体感するというオンライン学習を行った。学習内容としては、大型プロジェクターを使って、床面に陸上トラックやプール、砂場を映し出し、オリンピアン、パラリンピアンが走ったり、泳いだりする動きと高等部の生徒が競争するという活動をZOOMで配信した。モニターに映し出された選手のスピードに児童生徒が驚き、大変盛り上がる様子が見られた。



附属桐が丘特別支援学校

コロナ禍における実践から国際的視野の獲得と自己発信の新たな可能性を考える桐が丘

1. 本校の国際教育の特徴

附属桐が丘特別支援学校では、国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲のある児童・生徒の育成を目標に掲げ、国際教育の実践を全校で行っている。

本校の国際教育活動としては国際交流協定を締結している韓国・社会福祉法人SRC附属広州セロム学校（以下、セロム）や台湾・国立南投特殊教育学校（以下、南投）及び国立和美実験学校（以下、和美）との交流事業（写真1、2）が挙げられる。例年、この事業では、直接両国に児童・生徒の代表が赴き、交流活動や公共交通機関の利用体験、食文化を含む異文化体験を通じ、社会の様子やバリアフリー環境などの知見を広めている。また、事前指導を代表生徒だけでなく該当学部や学年全体で行い、帰国後に中高合同国際交流報告会を設けることにより、代表生徒の国際交流体験が広く校内で共有される構図がある。

今年度には、海外との直接交流の形だけでなく、新たな試みとして障害の有無、年代、国境にかかわらず自分らしく関われる分野として注目され始めたeスポーツに目を向けた取り組みを始めた。

また、筑波大学の外国人研修生や留学生との交流（写真3）は、対面による直接交流はかなわなかったもののオンラインによる交流として今年度で15回目を迎えた。例年であれば、定期的に昼休み・放課後に行われているイングリッシュルーム（写真4）と同様、児童・生徒が国際交流に主体的に取り組むために必要な姿勢を培う機会に繋がっている。



写真1



写真2



写真3



写真4

2. 活動報告

(1) 韓国 広州セロム学校との交流

例年、小学部と中学部の希望者の中から代表児童生徒を選出し直接交流を行ってきた。しかし、今

年度は世界的に蔓延している新型コロナウイルスの影響を受け、直接交流は厳しい状況であった。代替として、通常は事前指導として行っているオンラインによる間接交流を提案したものの、当校も相手校も新型コロナウイルス感染拡大予防のために分散登校等の対策を行っているため、時間の調整が難しく、今年度の交流は断念した。次年度の交流に繋げていきたいと考える。

(2) 台湾 国立南投特殊教育学校・国立和美実験学校との交流

例年、高等部から代表生徒を選び出し、南投と和美の両校と直接交流を続けていた。しかし、韓国交流と同様、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、今年度の直接交流を中止とした。代わりに、和美へeスポーツと関連させ、ニンテンドースイッチを媒体とし、東京2020オリンピックを題材にしたソフト（『マリオとソニックの東京2020（任天堂）』）を用いたオンライン交流の打診をした。

想定としては、当校と和美の両校で任天堂アカウントを所持し、任天堂onlineを通じてソフトを起動、相互フレンドとして交流を図るというものである。和美からは「ニンテンドースイッチとソフトを用いた交流自体には興味があるものの、台湾では任天堂製品を購入することが難しい」との返答があったため、和美分の購入も含め、以下の準備を行った。

- ①ニンテンドースイッチ本体の購入（当校用、和美用）
- ②アカウント作成に必要な校内メールアドレスの設定
- ③任天堂アカウント、海外アカウントの作成
- ④任天堂Switch Onlineへの加入
- ⑤和美との交流時間の調整

②、③に関しては、交流用のメールアドレス作成やアカウント作成を和美分も含め設定を行った。しかし、①に関し、ニンテンドースイッチ本体はリチウムバッテリーを3つ使っており、日本で購入して海外輸送となると梱包を2つに分ける必要があったため、この機器を用いた交流が本格的に決定した後で、購入先から和美へ直接送る流れをとることとした。また④に関しても、年単位ではなく、数か月単位の加入の方が運用しやすいことから、①と同様、本格的に動き出すことが決まり次第購入をする手筈とした。

実際には、機材の準備や設定に予想以上の時間がかかってしまったことで、台湾の学期の区切りで日本と違い1月半ばから2月半ばまで長期休暇に入ってしまうこと、日本では東京を含む11都府県において第2回目の緊急事態宣言が発令されたことを受け該当学部である高等部全体がオンライン授業へ切り替わった関係で、計画を詰めることが難しい状況が続いた。

今後の流れとして、今年度中のニンテンドースイッチを用いた交流に関しては状況的に難しく、次年度に引き継いでいく。今年度の交流については、双方で自己紹介や自国の文化紹介などの内容でオンラインにより、令和3年3月9日（火）・16日（火）で2回の交流を予定している。このオンラインを通じての交流に関しては10年近く前から継続して行われているため、このコロナ禍下においても比較的円滑に交流企画を進めることができている。過去の実績の蓄積と結びついているように感じる。また、オンライン交流にゲームという要素を加えた新たな交流に関し、円滑な交流に繋がるのではないかという当校の提案に和美も興味を示し賛同してくれている。これを機に、新たな交流の仕方の模索とその交流から得られる国際的視野の獲得、自ら世界と関わり発信していく姿勢を更に発展させていく効果が期待されると考える。

(3) Panasonic 主催 KWN（キッド・ウィットネス・ニュース）グローバルサミット2020へ参加

2020年11月22日（日）に当校の中2女子生徒1名、中3女子生徒1名と高1女子生徒2名の計4名がパナソニックセンター東京にて「キッド・ウィットネス・ニュース（KWN）グローバルサミット2020」（写真5）に参加した。

KWNとはPanasonic主催の映像制作活動を通じたグローバルな教育支援プログラムのことである。この取り組みには、当校研究グループの1つであるICT活用研究グループ（アシスティブテクノロジーを活用した教育実践研究グループ）で情報機器の使い方等について学習している中・高等部

の生徒たちが2018年度から参加している。

2019年度は今回グローバルサミットへ参加した生徒たちの『“当たり前じゃない”世界』と題した自主制作映像が、KWN2019日本コンテストで最優秀作品賞とベストドキュメンタリー賞を受賞した。このことにより、中学生・高校生部門（セカンダリー13歳以上18歳以下）日本代表として選出されグローバルサミット参加に繋がった。このグローバルサミットは2020年11月21日（土）・22日（日）の2日間にわたって開催され、両日合計で世界4か国6校26名の児童生徒同士がオンラインで参加し、交流を深めた。

当校の生徒はマレーシアにあるクアラ・ペスト高校の生徒と交流を行った。当初は、ベトナムのドン・ダ中学校も選出されており、マレーシア・ベトナム・日本の3か国で交流予定であったが、新型コロナウィルスの影響を受け参加を辞退したため、当日はマレーシアと日本の2校のみ参加となつた。サミット中は終始、司会も含め共通言語として英語が用いられた。そのため、オープニング後の自己紹介では、積極的に英語によるコミュニケーションを行った。

その他にも、アイスブレークとして「SDGs」に関するクイズ、クレイアニメーターであり東京藝術大学 大学院 伊藤有壱教授の「アニメーション映像ワークショップ」で実際にストップモーションのアニメーション制作を経験し（写真6）、国境の枠を超えて参加校全員で1本の作品になる「SDGs」リレー、KWNに出品した作品についてディスカッション（各国の映像作品講評）（写真7）、等の活動に参加した。

参加した生徒たちの感想として、活動内容それぞれが個々に印象深かったようだが、「自分たちが制作した映像について、生の声を聞くことができた」「（ディスカッションの相手校である）マレーシアの撮影秘話を聞けたことが面白かった」など、海外の同年代と共に通のテーマを基にリアルタイムで行えたやり取りが中でも思い出深いものとなったようである。



写真5



写真6



写真7

（4）高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流

令和2年12月8日、高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流を、総合的な学習の時間において実施した。留学生との交流は今年度で15年目となる。

国際交流実行委員の生徒を中心に、9月29日から11月24日まで事前準備の時間を8回持ち、交流を計画した。本番と事後指導を含めると計10回で行った。10月27日にはZoomをつないだ打ち合わせを設け、先方に企画の内容を伝えた。例年、第1学年は附属坂戸との交流の後、事前準備から参加していたが、今年度は密を避けZoomで行うことから、第2・第3学年のみとした。

今年度はインドネシア、マラウイ、タイ、ブラジル、ナイジェリアからの8名とオンライン上で交流した。この活動を通して、これまで知らなかつた世界の文化について知る機会としていること、自国の文化を振り返り海外に発信する方法として、絵やジェスチャー等を活用し創意工夫して伝え、それらの交流を通じて、留学生と通じ合うという体験をすることを目標としている。

3人程度6つのグループが「遊び（Play）」「食（Food）」「行事（Event）」の中から、興味のあるテーマを選び、より具体的なトピックを設定して準備を進めた。今回は直接対面ではなくオンライン上で交流であったため、「オンライン上で体験してもらうための工夫はどうするか」「一方的な発表の場にせず、相互交流の場とするにはどうしたらいいのか」という観点から、紹介したいことは何かを絞つていった。まず、「遊び」班は日本の「独楽」「すごろく」について紹介し、「食」班は「伝統

的なお菓子（和菓子）や和食」「味噌汁（世界の朝食）」について色とりどりの写真を見せ、「行事」班は「卒業式・入学式・月見・運動会・お正月」についてクイズ形式で出題したり、実際にその行事で使われる花飾りや福笑いを画面越しに体験をしてもらったりした。事前準備として、自分たちでごろくを作成したり、分かりやすい福笑いのサイトを探したりした。交流本番前は事前シミュレーションを行い、オンライン上での伝わりやすさや体験のしやすさなどを確認した。本番では生徒・留学生共に歓声が上がり楽しい雰囲気を共有することができた（写真8、9、10）。生徒たちは留学生と画面越しであるが故に場の雰囲気を共有しづらい環境の中で、大きめに頷いたり、マイク越しに届く声で相槌をしたり、ジェスチャーをしたりと共感を示す工夫も見られた。プレゼンテーションに取り入れる内容に関しても、言葉で説明することが主であり、ネットを介しているために伝わりづらい部分を補うような資料にしていた。

空間を共有しなくとも、英語をツールとして交流する経験を通じ、お互い離れた場所にいても異文化を知り、相手と心を通わせ合う体験を得られたようである。



写真8



写真9



写真10

3. 児童・生徒の変容

今年度は、世界的に新型コロナウイルスが蔓延したことにより、例年行われているほとんどの国際事業に関する活動にも制限が生じた。対面だけではない新たな国際交流の在り方を模索し、主体的かつ対話を通じて積極的に外国人人とコミュニケーションを図ることについて改めて考える機会となつた。

オンラインによるeスポーツ交流は、共通の機材の準備やソフトの設定などに予想以上に手間取り実際の交流に至らなかつたが、次年度以降のeスポーツによる交流に向けた第一歩を踏んだ。従前は直接交流に向けた事前交流の場としてオンラインを活用していた。蓄積されたこれらの経験を活かし、この世界的なコロナ禍を機に新たなオンライン活用の方法とその効果について考えていくことは、生徒が国際社会と自己とのつながりを自覚し、国際的に物事を捉える機会に繋がるのではないかと考える。

高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流に関しては、直接交流ではなくオンラインによる交流となつたことで、体験はどのようなものがしやすいか・見せやすいか、雰囲気の共有にはどのような工夫が必要か、など交流の進め方・方法について改めて振り返り考える機会となつた。今までの直接交流に加え、英語をツールとして交流する新たな場の模索という点で、生徒たちが卒後社会に出てから国際社会との関わり方についての可能性を垣間見ることができたと言えるのではないだろうか。

韓国及び台湾との交流について、従前は実際に海外渡航できるのが数名であることから事前指導と交流報告会を含む事後指導が重要であった。しかし、このような交流方法に加え、今年度から新たに取り組み始めたeスポーツを含むオンラインによる交流の在り方をさらに工夫することによって、生徒へ還元される国際的な視野の幅が広がることが期待される。

5. 各附属学校のイングリッシュルーム活動

附属小学校

留学生との交流会

1月14日、17日、2月24日、25日、26日にオンラインによる留学生との交流会を実施した。

通常は対面でおこなっていたが、コロナ禍で予定を変更してオンラインで実施した。子どもたちが日頃の英語学習で学んだ表現をアウトプットする場となることができ、オンラインながらも世界各国からの留学生を通して異文化について理解を深めることにもつながった。

今後、一人一台のパソコンが導入され、グループピングを行っての交流ができるようになれば、さらに盛んな交流ができると期待している。



今年度の English Room 報告

① 登校形態に応じて実施

今年度は新型コロナウイルス感染状況に応じて登校形態が様々に変更されたため、English Room もそれに応じた柔軟な実施を余儀なくされた。概要を表1に示す。

緊急事態												緊急事態	
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
休校	分散登校	夏休み	時差登校（全員登校）										
休室	休室→オンライン	休室	開室（前期週1、後期週2）				休室						

表1 登校形態と English Room 実施状況

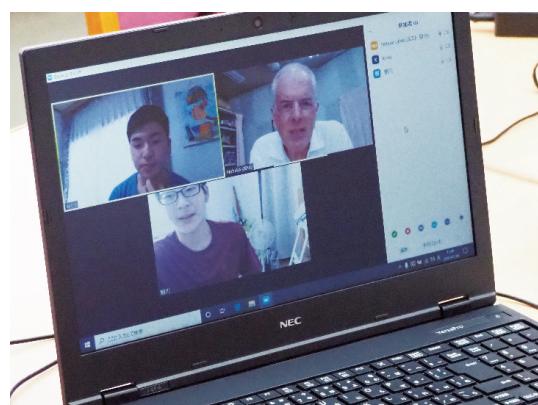
昨年度3月から今年度5月まで続いた休校期間中は、English Room も休室にした。オンラインでの実施も検討したが、まず通常授業分のオンライン学習指導を優先すべしとの結論に至った。緊急事態が解除された6月からは分散登校が始まったが、生徒が校内に滞在する時間を最小限に絞り込まねばならず、English Room 再開は見送りにした。7月末にそれまでの学習の定着度を見るための確認テストを何とか実施することができた時点で、検討を続けていたオンラインでの English Room を実施する機会を一度だけ持つことができた。

9月からは時差登校ながら念願の一斉授業が始まり、クラブ活動も再開され、やっと English Room を対面で始められるようになった。昼休みが短いため、放課後のみ開室し、前期は週1回（火曜日）、後期は週2回（火・水曜日）実施した。再開してからの利用方法は基本的に例年通りとした。これまで English Room を在校生全員に一度は体験してもらうために、3年生全員に利用枠を割りふっていたが、今年度は行わなかった。

- ・開室中は通常授業の Team-teaching の時間担当の ALT 2名が常駐する。
- ・利用時間は1枠 15 分交代、利用人数は1枠 2名までを原則とする。
- ・生徒は部屋の扉にある表に名前を記入して予約する。
- ・来室した生徒を毎週記録しておく。
- ・1年生の利用は後期からとする。
- ・アメリカ留学短期プログラム（2020年度、2021年度は中止）の写真や参加者レポート、その他国際関係のチラシやポスターを部屋の外に展示している。

1月に再び緊急事態となってからは、一斉登校での授業は継続できたが、生徒の構内滞在時間を再び最小限にせねばならず、English Room は休室としたまま、現在に至っている。

7月末のオンラインでの English Room はビデオ会議システムの zoom を用いて行った。通常と同じ15分枠で予約を募り、のべ約40名が参加した。2名のALTは1人は学校から、もう1人は自宅から「入室」した。このような形での English Room は、様々な制約下で一度しか実施できなかつたが、オンラインで English Room を行うためのノウハウを得ることができ、貴重な機会であった。



② 生徒の感想

- ・会話が続くのか、きちんと質問に答えられるのか、不安でとても緊張していたけれど、先生が優しく受け止めてくださり、安心して取り組めた。チアダンスの cheer の発音が悪くて伝わらなかつたこと、sea を ocean と言ってしまったことなどが反省だ。やっぱりいざとなるといつも言っていることも言えなくなってしまうのだと分かった。夏休みに行きたいところについて話せて、とても楽しかったです！
- ・家で行ったぶん、学校よりリラックスして会話することができた。話題も家の中だと、学校ではあまり出ないペットのことなどが出て会話がはずんだし、話したいことを一通り話した後も話題があるのでよく続いて、困ることはなかった。
- ・初参加で不安なことが多かったのだが、先生が優しく接してください、友達も一緒だったため、緊張がやわらぎ、とても楽しくやることができた。English Room はずっと前から参加したいと思っていたのだが、日程の問題や英語が苦手であることから今まで参加してこなかった。しかし今回は zoom ということで家からできるので、やりやすいなと思い参加しようと思った。English Room を経験することができてよかったです。
- ・zoom での English Room ということではじめは緊張していましたが、接続などに支障もなく、普段通りに English talk を楽しめました。話の内容も自粛期間についてなどが中心で、様々な表現を学べました。自粛中は英語で人と話せていなかったので、とても楽しく充実した時間となりました。（でもやはり夏休み後に ER で直接話すのは、何にも代えがたく楽しかったです。早く終息しますように）
- ・zoom でのコミュニケーションという形でしたが、普段通り円滑に楽しく進めることができました。もちろん、表情を正確に読み取ることは少し難しかったです。しかし、先生が何とか私たちに伝えようと一生懸命声をかけてくださったので、楽しく気楽にコミュニケーションをとることができました。zoom 上だったため、私も伝わりにくく気がしたので、できるだけはっきりと話すことでうまく会話ができました。もし機会があれば、また参加してみたいなと思いました。
- ・zoom での English Room は実施に行くよりも気軽に行けた。しかしパスワードを入れたり、機器トラブルがあったりして、少し難しかった。また、コミュニケーションに関しては、音声が少し聞きづらかったりしたが、聞きづらかったときに聞き直す練習にもなり、とてもためになった。
- ・zoom でやると、何か話に使うものがあったら取りに行けるので、やりやすかった。ただ家族に内容を聞かれるのがちょっと…。

附属学校のイングリッシュルーム活動について

① これまでの活動内容

2013度から始まった「イングリッシュルーム」は、今年度8年目を迎えた。例年はマクレイ先生（附属中学校のイングリッシュルームも担当）にお越しいただき、前期木曜日の放課後は、各国际交流プログラムに参加する生徒に対して英語による研修を行い、前期および後期の金曜日の午後は、1コマ20分で生徒がマクレイ先生と英語の練習を行った。ボブ先生には、主に火曜日の放課後の英語新聞部の活動に参加してもらっていた。

以上のように、本校での「イングリッシュルーム」は、幅広く誰でも参加できる場として設定している点が大事であると考えている。

② コロナ過での本年度の活動

昨年度末からの自宅学習により、残念ながら例年のように新年度開始と共に「イングリッシュルーム」を開始することはできなかった。実際に「イングリッシュルーム」を活動できるようになったのは、夏季休業明けの8月末からである。

分散登校B（短縮授業、および朝・放課後の活動の縮小）の期間は、以下のように、できるだけ例年の形に近い「イングリッシュルーム（予約制）」を実施することができた。

・8月～12月（分散登校B）

火曜日 放課後の15時から16時の1時間、英語新聞部の活動参加（ボブ先生）

木曜日 午後の5、6限目に選択授業のない3年生対象（マクレイ先生）

金曜日 午後の5、6限目に選択授業のない3年生対象（マクレイ先生）

放課後の15時から16時の1時間、1、2年生対象（マクレイ先生）

1月からの対面授業とオンライン授業併用の分散登校Cの期間は、校内での朝、放課後の活動が基本的に禁止となってしまった。そこで、生徒が少しでもボブ先生、マクレイ先生と英語を使やり取りができる時間を設けるべく、お二人の協力のもと以下のような時間帯を行った。この期間は予約制にはせず、生徒は自由に両氏と話しができるようにした。

・1月～3月（分散登校C：対面授業とオンライン授業の併用期間）

火曜日 登校可能時間から1限目のTT授業開始（ボブ先生）

木、金曜日 登校可能時間から1限目開始、及び放課後30分程度（マクレイ先生）

③ 児童生徒の感想

今年度は、特にエッセイの添削（主に3年生）、スピーチの準備と練習（主に1年生）を依頼する生徒が多く、限られた時間帯ではあったが非常に好評であった。推薦入試の英語面接を控えた生徒は、マクレイ先生は様々なトピックについて議論させてもらえるので非常に助かる、と感想を述べていた。自宅学習が続き、英語を話す機会があまりなかったため、「イングリッシュルーム」を使ってできるだけ英語を使う時間を持つようにした、という生徒も例年以上に多かったように思われる。1月以降は予約制ではなかったため、年間の正確な利用者数はわからないが、最終的に例年通り延べ50名近くの生徒が参加したと考えられる。

④ 今後へ向けて

次年度も、海外交流を含めて活動の制限が予想される。そのような状況であるからこそ、授業外でも生徒が個々の目的に合わせて英語を使用する場があることがとても大切であり。実際に使える英語力を伸ばしたいと考える本校生にとって、「イングリッシュルーム」がもたらす役割はとても大きいと言える。生徒が安心して生きた英語に触れあうことのできる「イングリッシュルーム」を次年度もぜひとも実施し、最大限、生徒の学習をサポートしていきたい。

English Room : 日常活動および海外研究発表とその先の支援

1. 活動報告

本校のイングリッシュ・ルームは2013年にスタートした。月に2回ほど、放課後3:30~5:00に東大大学院の留学生に来てもらい、それぞれのご専門について語ってもらったり、語学部が英語ディベートのコーチを受けたりしている。(もちろん、希望者が参加することも可能である)

また、台湾・釜山への生徒派遣をする前に、現地で発表する研究プレゼンテーションの原稿チェックやプレゼン・コーチもしていただいている。中3のテーマ学習や高2の課題研究のScience Dialogue(講座の前半では科学系研究者のプレゼンを伺い質疑応答、後半では自分のテーマを決めて英語でプレゼン活動)。その際のコーチや、最後のプレゼンテーション大会のコメンテーターもしていただいている。登録されている方が6~7名おり、それがプレゼン経験も豊富で、しかも英語を第2外国語としている方が多いので、学習者の英語学習の苦労も心得ており、英語のチーム・ティーチングでネイティブの方から教わるのとは違った利点もある。

ただ、今年度はコロナ禍の影響で、いずれもオンラインの実施となった。

2. 生徒への影響

生徒には様々な形で刺激となっているが、特に最近は、語学部のディベートチームへのトレーニングに多大なる貢献をして頂いており、大会等での上位入賞の原動力となっている(1学期の休校期間中にはオンラインでの指導もして頂いた)。また、例年は中3テーマ学習・高2課題研究の「サイエンス・ダイアログ」での生徒の発表指導や、台中一中や釜山国際高校との交流での発表原稿・プレゼン指導にもご尽力頂いているが、今年度はコロナ禍で実施が難しかった。



English Room もオンラインにて実施



サイエンス・ダイアログの審査もオンラインで

(文責: 研究部・国際交流担当 八宮孝夫)

コロナ禍でもできる楽しい英語活動と WWL 校としての活動の両立を目指して

① 活動報告

本校では 2013 年よりイングリッシュルーム活動として、昼食時の English lunch (イングリッシュランチ) と、放課後の English Cafe (イングリッシュカフェ) を、週 1 回取り組んでいる。2 つを総称して English Salon (イングリッシュ・サロン) としている。今年度はコロナ禍により、1 学期は活動を控え、8 月の夏休み期間にオンラインで実施した。

期間：8 月 4 日～28 日 お盆休みを除く毎週火曜日・金曜日 全 6 回

10:00-10:50 Beginners

11:00-12:00 Intermediate and Advanced

参加者は最大 18 名から 1～2 名の日もあったが、ネイティブ講師の他に英語科の教員も加わり、人数に合わせて、ゲームやディスカッションを楽しむことができた。

9 月からは生徒が登校したが、食事をしながらの会話を避けて昼休みには行わず、例年は週 1 回、放課後 2 時間実施しているサロンも 16:00～17:00 に縮小して行った。短時間ではあったが、例年通り、英語でボードゲームや会話を楽しむ機会となり、ハロウィンには教員住宅に住む職員の子どもたちも交えて、カボチャでランタンを作り、アメリカ文化を経験した。下校時間の制限のため、例年行っているクリスマスパーティーでのお菓子作りは中止した。

コロナ禍で海外研修は中止、海外からの留学生も来日せず、英語によるコミュニケーションの機会は少なくなっているが、生徒たちの多くは英語を話せるようになりたい気持ちを持っており、卒業後には留学を考えている者もいる。英語を使う体験を作り出し、いかに多くの生徒を誘導するかを今後も工夫していきたい。



ハロウィンパーティー



オンラインでのイングリッシュ・サロン

② 生徒の感想

- ・授業以外でも英語のアウトプットの機会があってよかった。(1 年男子)
- ・アメリカ文化を学びながら英語の勉強ができた。(1 年男子)
- ・英語を聞き取るのが難しかったが、お菓子を食べながらリラックスして英会話の練習ができた。(1 年男子)

附属視覚特別支援学校のイングリッシュルーム活動

① 小学部活動報告

昨年度までは、希望者が参加する課外活動としてイングリッシュ・ワークショップを行っていましたが、今年度はネイティブの外国人講師によるレッスンを全員が受けられるよう、授業の一環として年4回の英語活動を設定しました。感染症対策として密集を避けるため、教室より広いプレイルームで行い、1～6校時に学年ごとの少人数（2～8人）でレッスンに参加してもらいました。講師はシェーン・コーポレーションに派遣を依頼し、アメリカ人のリーナ先生が担当してくださいました。

まず、自己紹介で講師が “I'm Lena. What's your name?” と言った後、一人ずつ “I'm ~.” と自分の名前を英語で言いました。

その後、clap や stomp などの言葉と動作を確認した後、“If You're Happy and You Know It” の曲に合わせて、手拍子したり足踏みしたりしながら歌いました。

次は、“What's this?” と提示された果物・野菜模型を触って確認してから、“It's an apple.” のように英語での表現を習いました。その後、“Do you like ~ ?” と質問し、“Yes, I do.” なら部屋の右側、“No, I don't.” なら部屋の左側に移動するゲームをしました。この時、“Ewww, I don't like banana!” とリーナ先生が言った言葉を聞き取れた児童が、「ええー！リーナ先生、バナナ嫌いだって。」と驚いていました。

次はBook Time で “The Very Hungry Caterpillar”（はらぺこあおむし）を読みました。英語版の点字付き触る絵本や拡大本を見ながら、リーナさんが英語で読み上げる朗読を聞いたり、後に続けて読み上げたりしました。

絵本の後は、Craft Time です。カラフルなフェルトボールで作る“あおむし”的工作をしました。リーナ先生が一人一人の材料を準備してきてくださいり、英語で指示を聞きながら作りました。

2回目のレッスンでは、正方形、長方形、三角形、円、星型の英単語を習い、仕掛け絵本 “The Happy Little Yellow Box” の朗読、Square の顔作りをしました。折り紙に丸い目や長方形の手足を貼って作る、個性的な顔が出来上がりました。

本校では、見えない、見えにくいゆえに、絵カードの提示で理解することが難しい児童もいます。英単語の概念を模型や実物の図形、動きなどと関連付けて確かめることを大切にしています。本校がこれまでイングリッシュルーム予算で購入した英語の本や果物・野菜模型などの教材も大活躍しています。

（文責：中村里津子）



② 中学部・高等部活動報告

中学部では、今年度は新型コロナウイルス感染対策のために、下校時刻が早まるとともに放課後の活動が制限され、年度を通して3年生に1回実施したのみとなってしまった。講師は例年通り、通常の授業でお世話になっているALTの方にお願いした。

高等部では、今年度も7月から1月まで、計18回イングリッシュルーム活動を実施した。7月まで開始できなかったのは休校のためであり、2月以降に開催できなかったのは緊急事態宣言によるものである。講師は昨年度に引き続き、ニュージーランド出身のネイティブスピーカーに依頼した。

開催方法も昨年度までとは異なり、すべてズームによるオンラインで実施した。また、下校時刻も16時30分に繰り上がったため、1回で1学年全員というわけにはいかず、クラスを二分した。その代わり、火曜日を高1と高2、金曜日は高3のみを対象とし、週に2回実施した。また、生徒同士の密を避けるため、グループ活動は行わず、年度を通して1対1で行った。年度途中から、講師の方で175個のテーマを書いたカードを用意して下さり、生徒がくじのようにその番号を言って、そのカードに書いてあるテーマで話すというスタイルで会話が進んだ。

③ 中学部・高等部生徒の感想

- ・私は、このイングリッシュルームで、非常に良い経験ができました。将来的に英語を使えるようになるためには、試験や検定で成果を出すことよりも、実際に英語を聞き取り、自分の思ったことを話せる力をつけることが大切だと考えています。これからも、このイングリッシュルームを通して、より英語を聞く力、話す力をつけていきたいです。
- ・今年のイングリッシュルームは、オンラインが多かったが、今まで通り楽しく話すことができた。数字とアルファベットを選んでテーマを決める方法は、どんなテーマになるのか楽しみなうえに、ゲーム性もあるのでとても良いやり方だと思った。これからもいろいろな方法で先生と話しながらspeaking力を高めていきたいと思った。
- ・コロナ禍という大変な状況の中、私たちのためにさまざまな工夫をして楽しませていただき、ありがとうございました。話す力が身についた気がしています。またよければ参加したいです。
- ・普段から外国人の人とかかわることがあまりなく、実践的に英語を使うことが少なかつたので、とても意義のある経験をすることができたと思います。また、あまり他国の人と触れ合うことが得意ではなく、今まで楽しく会話をすることができなかったのですが、何回もやっていくうちに、意外と楽しいものだと気づくことができました。ありがとうございました。今後も続けていけると良い経験になると考えています。
- ・私は入学当初英語に苦手意識を持っていましたが、イングリッシュルームを通して英語や海外に興味を持つことができました。テキストを読むだけでなく実際に英語でコミュニケーションを取ることで、学んだ英語を生かすことができるため、イングリッシュルームはとても良い機会であると思います。

(文責：片山 翔)

「見る、聞く、話す、書く」を工夫したイングリッシュルーム

小学部、高等部普通科、高等部専攻科はイアン先生、中学部はコリン先生を講師に招き学部毎にイングリッシュルームを実施した。

1. 小学部

小学部では、イングリッシュルームを、「聴覚障害児にとって貴重な言語学習の機会」と捉えている。講師のイアン先生との交流を深めることを目標に活動を行った。また、3学年以上の児童については、活動を通じて英語の楽しさを味わうことも併せてねらいとした。今年度は、新型コロナウィルス感染症対策としてクラス単位で（各クラス1回ずつ）実施した。

1年生は、イアン先生に教わった英語のあいさつを使ってやりとりをした。先生の問い合わせをよく聞き取り、自ら積極的にコミュニケーションをとろうとする様子が見られた。

2年生の活動内容は、自己紹介や好きな動物や食べ物などの紹介であった。イアン先生が表情豊かに話してくださるので、子供たちも積極的に話し、先生とのやりとりを楽しむことができた。

3年生は、子供たちがアルファベットの大文字を指で作り、クイズ形式で何を作ったか、イアン先生に当ててもらう活動を行った。4年生は、自分の好きなトッピングののったピザを英語で紹介し、そのイラストを先生に当ててもらう活動を行った。3年生、4年生ともに、イアン先生が積極的に児童とかかわってくださったので、子供たちも打ち解けて、意欲的に活動でき、子供たちからは、「とても楽しかった」「また一緒に活動したい」という感想が聞かれた。

5年生と6年生は、自己紹介やイアン先生への質問を英語で表現する活動を行った。イアン先生から、より一般的な英語表現や分かりやすい表現の仕方を聞きながら、自己紹介をしたり、質問をしたりすることができたので、とても楽しく有意義な活動となった。

イアン先生との交流活動では、英語でのやりとりの必要性や機会が生じ、やりとりの楽しさを感じることができるので、子供たちの積極的な活動につながっているのだろう。子供たちにとってイングリッシュルームは、英語に関するこれまでの学習を生かしたり、やりとりを楽しんだりするたいへん貴重な機会となった。

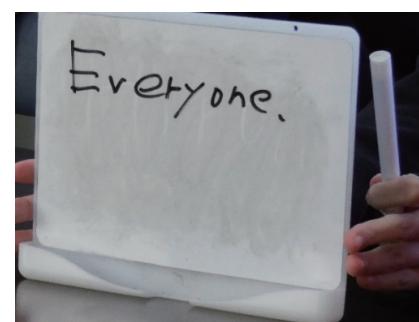
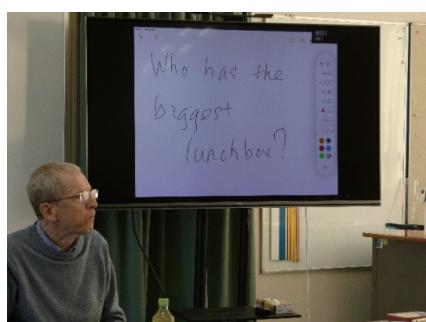
2. 中学部

新型コロナウィルス感染症対策を講じながらの実施となった。ネイティブ講師と生徒、生徒同士の距離を十分に取り、発言する際にはフェイスシールドの着用を徹底した。

生徒は従来通りミニホワイトボードを活用し、講師はiPadに質問等の英文を書いてもらい、電子黒板に表示することにより、講師からの発信が伝わりやすくなった。また、今年度はApple Pencilを導入したことにより、文字が読みやすくなり生徒から好評であった。

これまで学習の様子を本校の教員がデジカメで撮影することにより、事後の学習につなげていたが、今後は画面のキャプチャーなどデジタル機器の機能も十分に活用していきたい。また、生徒の発言もデジタル機器上

で扱えるようにして、活動を容易に振り返ることができるようになることが今後の課題である。



3. 高等部普通科

高等部普通科では、昼休みの時間を使って延べ5回実施した。イアン先生には、今年度の普段の英語の授業にも協力していただいている。自己紹介、学校生活、文化祭、将来の夢等について、その内容に関する質疑応答を英語で行う形式で進めた。生徒が積極的にイアン先生に話しかけ、自然な流れで会話が弾んだ。生徒は聴覚に障害があるため、口頭のみの英会話は難しい。できるだけ教員の通訳を介せずにコミュニケーションがとれるように確実な文字情報提示を心掛けた。具体的な手段として、イアン先生の発話はiPadの筆談アプリ等を使用して文字情報をスクリーン上に投影した。生徒の発問は直接、口頭で発問するか、iPadの筆談アプリ等を使用して文字提示をした。イアン先生が生徒の質問内容をiPadの筆談アプリ等を用いて文字提示し、スクリーン上に投影した。文字情報を確認しながら会話を進めることで、聴覚障害のある複数の生徒とイアン先生の自由な会話が成立するようになった。イアン先生からの興味深い内容の発問もあり、生徒の英語はより自然な英語に訂正してもらえる楽しい時間になった。高等部普通科の生徒は委員会活動や部活動などの特別活動も多いため、参加が難しい生徒もいる。しかし、イングリッシュルームにはほぼ毎回参加する生徒もあり、貴重な時間になっている。生徒たちからは、「先生の考えが聞け、後輩との交流もできて楽しい。」という感想が多かった。



4. 高等部専攻科（造形芸術科 ビジネス情報科 歯科技工科）

専攻科では、講師と生徒の交流時間の確保のため、造形芸術科・ビジネス情報科と歯科技工科の二つに分かれて5回ずつ実施した。その際、情報保障として音声認識専用無線マイクと音声を文字に変換するアプリを用いて、講師の話す英語をテレビ画面に表示した。

造形芸術科・ビジネス情報科は全員がiPadを使い1回目は自己紹介、2回目以降は生徒から講師への質問を中心に展開した。初回終了後に「書いてくれた説明がわかりやすかったのでメモをとろうとしたところ消されていた」という感想が複数あった。生徒との相談の結果、生徒が輪番で講師の板書をiPadで写真撮影することで、メモのために活動が止まる時間も会話に充て、翌日の英語の授業でその画像を用いた振り返りの学習を行うようにした。生徒からの発信による進行方法の改善が行われた他、「英語は上手に話せなかったが、講師とたくさん話せてよかった。もっと話せるように英語を勉強したい。」「基本的な表現だけでなく、知っているとかっこいい表現や便利な表現も教えてもらえてよかった。」といった感想が多く聞かれた。

歯科技工科では、ホワイトボード等を用いながら、生徒から講師への質問とそれらに関する話題についての会話を中心に行った。その他、生徒の専門を活かした石膏流しや授業で使う材料で名前ボード作りを行い、生徒たちはジェスチャーも使いながら講師に説明し、楽しい時間を過ごした。英語に苦手意識のある生徒たちだが、「知らない単語や聞き慣れない発音もあったが、様々な話をして面白かったし参考になった。」「英語でコミュニケーションができるようになると単語や文法を教えてくれて、前よりもうまく会話ができるようになった。」「日本人がもっていない価値観をもっている人と話せてよかった。」といった前向きな感想が多かった。



知的障害特別支援学校におけるイングリッシュルーム活動

① ALT を活用した英語学習

附属大塚特別支援学校では、今年度は、幼稚部から高等部まで ALT (Assistant Language Teacher : 外国語指導助手) による英語学習に年間で各部8~10回取り組んできた。授業は英語のみで行われ、幅広い発達段階にある児童の個別の教育的ニーズに配慮し、オンライン、イラストカード、名札、身振り、歌などの手立てを用いて、挨拶、自己紹介、今日の天気、日付、曜日、起立・着席の指示理解、色の名称、数詞、『ABCの歌』、自分の好きなもの、読み聞かせ、季節の行事などの学習を行った。



② ALT (外国語指導助手) による集団での英語学習の成果を活かした自己紹介

ある授業において、英語で挨拶をして、絵カードを用いて自分が好きなものを発表することを学習した。その学習成果を活かして、全校で「I like ○○○。(自分の好きなもの)」を英語で自己紹介ビデオを制作することとした。幼稚部の児童は、英語の歌に合わせて絵カードや具体物を使って自己紹介を行った。小学部の低学年と中学年では、モニターに写真やイラストで各児童が好きなものを映し出し、高学年では、ジェスチャーや言葉で自分の好きなものについて自己紹介を行った。中学部の生徒は、好きなもののイラストや写真を持って自己紹介を行い、高等部の生徒は、イラストやタブレットを使って、英語とインドネシア語で好きなものの自己紹介を行った。これらの自己紹介ビデオはZOOMの全校集会で共有され、児童生徒間交流に大いに役立った。



オンライン実践の効果と児童生徒の国際的な捉え方を刺激するイングリッシュルーム

① 活動報告

2名の外国人講師（以下、ALT）が、例年それぞれ小学部、中学部、高等部の学部ごとに設定された部屋で待機し、児童生徒のニーズに対応する形で対面実施を行っていた。しかしながら、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学校再開すぐの対面実施は難しく、夏季休業期間まで実施は見送りとなっていた。

夏季休業期間に、Web会議システムZoomを用いたイングリッシュルームonlineを開設し、小・中・高等部の学部ごとに行なった（写真11、12）。会話の混線を避けるため、各回30分5人程度の少人数で行い、その代わりに1日の回数を小学部7回、中・高等部3～4回と細かく分けて開催した。初の試みであったが、臨時休校中のオンライン学校で得た経験を基に、ALTも児童生徒もZoomを使いこなしながら参加していた。

11月からは対面のイングリッシュルームを再開した。毎週開設はしていたが、参加する学年を隔週ごとに設定することで、新型コロナウイルス感染拡大予防に努めた。小学部は、毎週木金の2回行ない、そのうち木曜は午前授業で終わる1～2年生向け、金曜日は3～4年の週と5～6年の週を隔週設定とした。中・高等部は毎週木曜日の放課後1時間の設定で、中学部と高等部を隔週で設定した。昨年度から、児童生徒がイングリッシュルームに参加する機会を確保する方法として、学部の枠を流動的にし、小学部は中学部へ、高等部は中学部への参加を可としていたが、今年は学部を跨いだ活動に制限があり、実施には至らなかった。

また、1月からの緊急事態宣言再発令に伴い対面開設を延期することとした。代替として、ALTが作成した動画を当校のホームページ上に公開し、時と場所を選ばず英語に触れることができる機会とした（写真13）。小学部から動画作成が済んだものから順次公開し、中・高等部の動画に関しては作成中である。

活動内容としては、各学部担当者がその場に集まつた児童生徒の実態や英語の学習状況によって設定し行なっているため様々な取り組みが行われている。小学部では、歌やゲームを通じてコミュニケーションを取る際に必要な単語（曜日、月、天気、色、大きさ、食べ物など）やフレーズ、基本的な英会話表現（挨拶、自己紹介、好きなもの、できることなど）に慣れ親しんでいる。

中学部では、生徒が授業で学んだ単語や表現を実践的に用いることができるような取り組みが考えられている。その際、間違いを恐れずにコミュニケーションがとれるよう、雰囲気作りも大事にしている。

高等部では、生徒が教科書等から得た知識を知識だけで終わらせるのではなく、ALTの体験や海外の状況等を会話に取り上げ、生徒たちの興味関心の幅を広げる工夫がされている。全体的に、取り扱う話題に自由度が高く、新たな表現や文化の違いに触れながら知識を吸収し、英会話を楽しんでいる。



写真11



写真12



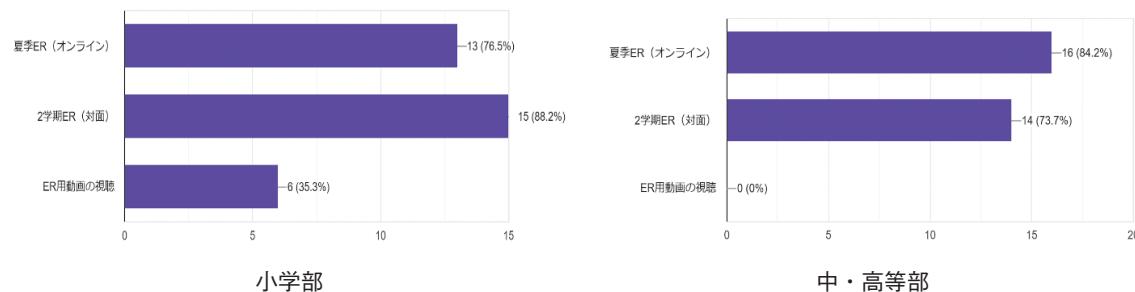
写真13

② 児童生徒のアンケート回答より抜粋（回収数：小 22/35、中 18/26、高 17/26）

アンケート質問項目【グラフ項目】

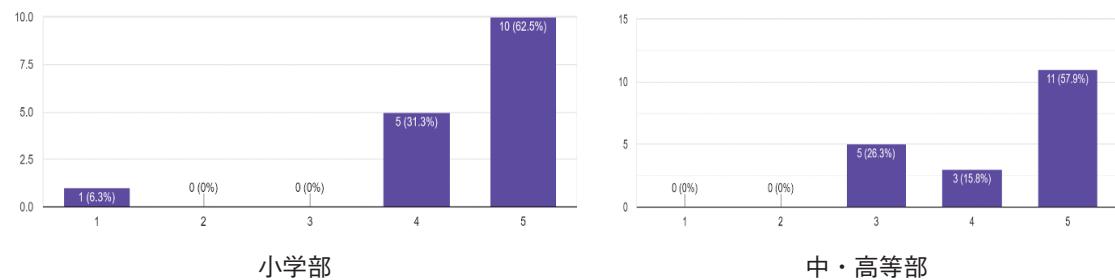
1 イングリッシュルームの参加方法について（複数回答可）

（夏季 ER（オンライン）、2 学期 ER（対面）、ER 用動画の視聴）



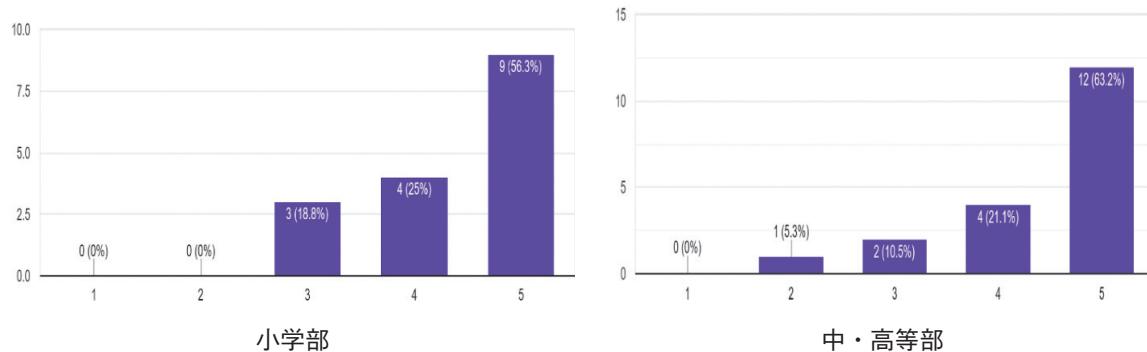
2 イングリッシュルームは楽しいと感じる

（1 感じない – 2 あまり感じない – 3 どちらでもない – 4 少し感じる – 5 とても感じる）



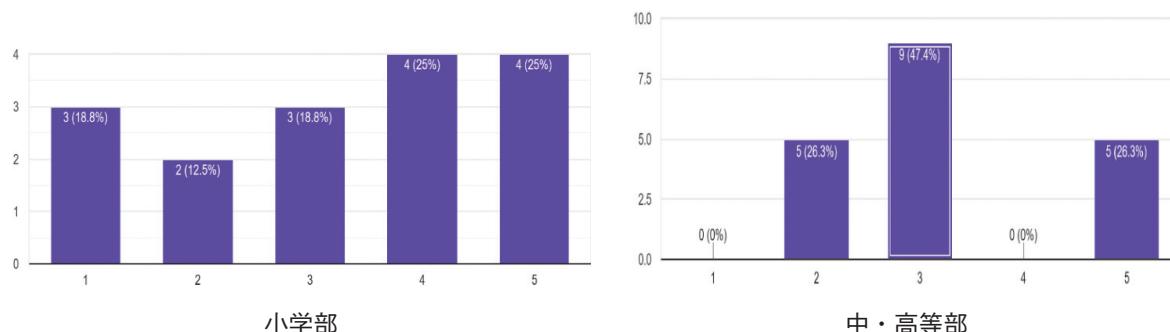
3 イングリッシュルームでは役立つことが学べると思う

（1 思わない – 2 あまり思わない – 3 どちらでもない – 4 少し思う – 5 とても思う）



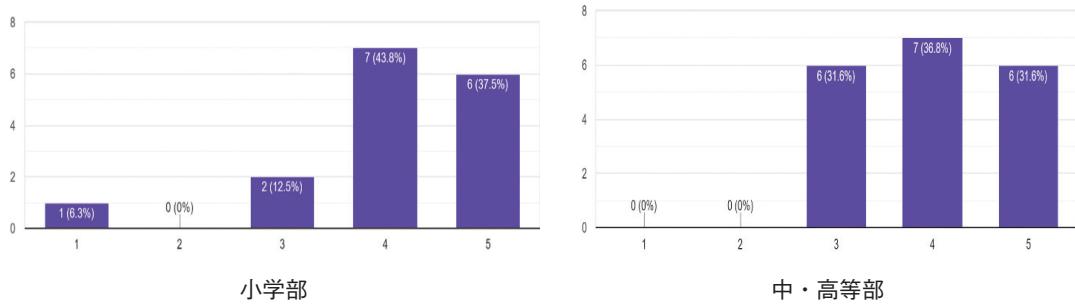
4 イングリッシュルームで学んだ事を、他の場面でも使うようにしている

（1 思わない – 2 あまり思わない – 3 どちらでもない – 4 少し思う – 5 とても思う）



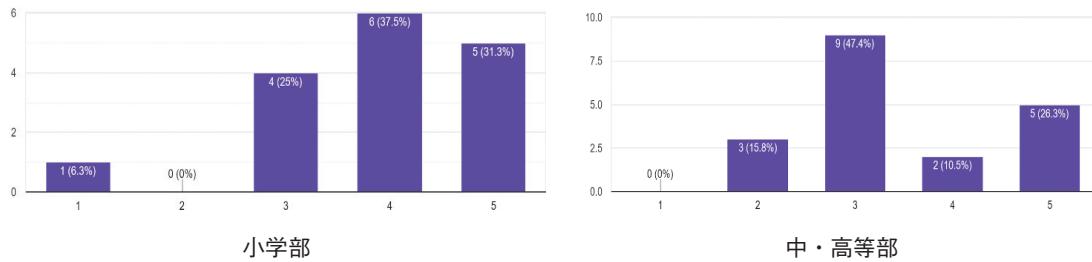
5 イングリッシュルームでは積極的に英語を使っている

(1 思わない - 2 あまり思わない - 3 どちらでもない - 4 少し思う - 5 とても思う)



6 イングリッシュルームに参加してきて自分は変わった

(1 思わない - 2 あまり思わない - 3 どちらでもない - 4 少し思う - 5 とても思う)



アンケート質問項目【自由記述】

1 イングリッシュルーム内で行ったことの中で楽しかったこと、難しかったこと

＜小学部＞

- ・歌やゲーム、ダンス、クイズをしたこと。(多数)
- ・ALT が明るく、楽しい。(多数)
- ・動画の絵本で知らない英語の動物の名前が出てきて難しかったけど、覚えられて楽しかった。
- ・オンラインでやり取りしづらかったり先生が言っていることが分からぬところがたまにあったりした。

＜中・高等部＞

- ・他学年の生徒 / ALT と交流すること。(多数)
- ・日本と英語圏との言語感覚の違いを学べたことが楽しかった。
- ・言いたいことを正しい英語に直すことが難しかった。
- ・オンライン回線が止まってしまうことがあり難しかった。

2 イングリッシュルームは楽しいで、「4 そう思う 5 とてもそう思う」を選んだ理由

＜小学部＞

- ・ALT の先生が明るく、楽しいから。(多数)
- ・英語が好きだから。(多数)
- ・歌で盛り上がるから。(複数)
- ・英語が上達するから。

＜中・高等部＞

- ・知らない単語を学ぶことができるから。
- ・授業とは違う感覚でより楽しく学ぶことができるから。
- ・新しい単語や単語が持つ由来を知ることができるから。(複数)

3 イングリッシュルームでは役立つことが学べるで、「4 そう思う 5 とてもそう思う」を選んだ理由

《小学部》

- ・イングリッシュルームで覚えた英語で、ALT の先生と話ができるようになった。
- ・英語の聞き取りができるようになってきたから。

《中・高等部》

- ・実際に授業で学ばない単語や日常生活で使える英語を学べるから。(複数)
- ・国際交流にも活用できると感じるから。

4 3と同項目で「1全くそう思わない 2あまりそう思わない 3どちらとも言えない」を選んだ理由

《小学部》

- ・外国人と話す機会がないから。

《中・高等部》

- ・英語をツールとして他学年や教員との交流に主軸を置いていると想っているためイングリッシュルームで学ぶことはあまり考えていない。

5 イングリッシュルームで学んだ事を、他の場面でも使うようにしているで「4・5」を選んだ理由

《小学部》

- ・家族や担任の先生と話すときに使う。
- ・ALT とそれ違う時に使う。

《中・高等部》

- ・英語の授業や国際交流の時に使う。(複数)

6 イングリッシュルームで学んだ事を、他の場面でも使うようにしているで「1～3」を選んだ理由

《小学部》

- ・英語を使う場面がない。

7 イングリッシュルームに参加してきて自分は変わったで、「4・5」を選んだ理由

《小学部》

- ・英語を話すことが好きになった。(多数)
- ・英語を身近に感じるようになった。
- ・英語を言うと、体が元気になる。

《中・高等部》

- ・英語がより好きになった。(多数)
- ・積極性に繋がった。
- ・英語の発音が上手になった。

8 イングリッシュルームに参加しなかった理由

《小学部》

- ・曜日が合わなかった。(多数)
- ・情報処理が苦手なので、人数が多い場所が苦手だから。

《中・高等部》

- ・時間、曜日が合わない。(多数)
- ・帰りの公共交通機関との時間の調整が難しい。

9 その他感想や今後行ってほしいことについて

『小学部』

- ・たくさん外国の色々なゲームで英語を覚えていきたい。
- ・正式に習い事の一環として英語教育を受けさせてあげたい。(保護者)
- ・季節ごとの行事も楽しいからやってほしい。(ハロウィン・クリスマスなど)

『中・高等部』

- ・クイズやレクリエーション的な企画を行ってほしい。
- ・もう少し参加の機会があると良い。(複数)
- ・小～高にかけてイングリッシュルームは英語に触れて親しみを感じる貴重な時間だったので、後輩にも同じような経験をしてほしい。(高3)

以上のことから、どの学部においても、児童生徒はイングリッシュルームを積極的に活用していると言うことができる。また、比較的イングリッシュルーム内では学んだ知識を活かし、実際に ALT が発する英語の音に耳を傾け、身近な話題を楽しんでいるようである。更に、英語力だけではなく、年齢が上がるにつれて授業や国際交流などでコミュニケーションを図る態度や表現してみようという意欲にも繋がっている。この点において、イングリッシュルームは、本校の国際教育活動を支える大きな役割の一端を担っていると考えられる。しかしながら、今年度は状況的に活動回数を減少せざるを得なかつた。オンラインを活用した試みも行ったが、ネットワーク回線や運用の仕方も含めて、まだ工夫の余地がある。故に、どのような状況においても、児童生徒自らが、イングリッシュルームの機会を利用し、英語の得手不得手にかかわらず英語に興味関心を持ち、「使ってみたい・もっと知りたい」と感じることができるような場を整えていきたいと考える。児童生徒が持っている英語学習への興味関心を軸に、その他の国際教育活動にも繋げていきたい。

6. おわりに

本学附属学校での国際教育を振り返って

附属学校国際教育推進委員会委員長 濱 本 悟 志

今年度は COVID-19 感染拡大の影響で異例の一年となった。通常の授業から学校行事をはじめとする特別活動まで大きく制限され、その中の国際教育の扱いに戸惑うばかりであった。COVID-19 感染拡大は国際的に共有する難題で、それに対する取組そのものが共通理解と情報共有につながるとの思いから、「報告書（第 12 集）」の刊行に踏み切った。各校の取組はすべて、困惑、葛藤、模索の中から生み出されたものであり、その中から打開への創意工夫を感じていただけたら幸いである。

筑波大学学校群では、第 2 期中期目標・中期計画（2010～2015 年度）の策定に先立ち、「先導的教育」「国際教育」「教師教育」の 3 つの拠点構想を立ち上げ、第 3 期中期目標・中期計画（2016 年度～）では、この 3 拠点構想を基盤に筑波型のグローバル人材育成システムとインクルーシブ教育システムの構築を目指してきた。どちらも“境界を越えて”を合言葉に、環境や文化の異なる者同士の交流を通して、互いの個性を尊重し能力を高め合うダイバーシティ社会の実現を念頭に置いている。

グローバル人材育成の観点では、2014～2018 年度に附属高等学校と附属坂戸高等学校が SGH 校の指定を受け、附属駒場高等学校の SSH 研究開発と併せて、国際教育を推進する様々なプログラムを開発してきた。さらに、2019 年度より文部科学省の WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業として、新たな国際教育に取り組むことになった。今までのような学校単位での個別な取組ではなく、地方自治体の教育委員会あるいは国際展開力のある大学が組織の核となり、複数の国内外の高等学校、管理機関である大学の関係部署、国際教育機関、賛同する企業等がネットワークを形成し、グローバル人材育成を推進する新たな事業である。本学は、附属坂戸高等学校を拠点校として、以下の 5 つの柱の基にこの事業を推進している。

- ①附属坂戸高等学校（事業拠点校）での国内外フィールドワークを取り入れた体系的な探究型カリキュラムを開発する。
- ②国内外の大学との連携を図り、留学生派遣と受け入れの推進、先取り履修等の接続を視野に入れた高度な学習を可能にする学習環境を整備する。
- ③事業連携校とグローバル人材育成システムに関する情報交換と比較研究、教員研修も兼ねた合同海外フィールドワーク等により成果を検証する。
- ④筑波大学の特色である「オリンピック・パラリンピック教育」と「インクルーシブ教育」を通じたマインドセットを涵養し、国内外の活動や国際大会への参加を推進する。
- ⑤高校生 SDGs 国際会議を開催して成果を発表して共有し、社会に発信する。

現在の日本を取り巻く環境には厳しいものがある。少子高齢化による労働力と経済力の低下や、環境及びエネルギー問題をはじめとする地球規模課題等に立ち向かう、次世代を担うグローバル人材の育成が求められている。これらの社会的なニーズに応えながら、国立大学法人の附属は次世代の人材を育成する新たな教育課程や実践プログラムを開発するミッションを背負っている。環境や文化の異なる海外の人々と協働して国際的社会問題に取り組み、問題提起から解決に至る過程でリーダーシップ及びフォローアップを発揮できる人材の育成が必要である。個々の附属学校が全国のセンター的な存在として先導的な教育活動を開発するとともに、校内でのイングリッシュ・ルームや海外合同フィールドワークに代表される附属学校群としての共同開発を推進し、国内外への発信と共有を目指していきたいと考えている。

(資料) 附属学校の国際交流協定締結状況

項目 学校名	締結相手 (国名、機関名)	協定締結日	現締結期間	交流の分野	締結の目的	締結の経緯
附属小学校	光州松源初等学校	2016.10.11	2016.10.11～2019.10.10	教員同士の授業技術の交流		
附属中学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属高校	2006.12.1	2011.4.28～2016.4.27	中等教育全般	中学校のレベルで、生徒の相互交流の意義とその可能性を考慮したため	北京師範大学と筑波大学との交流を目的として結ばれた協定のなかで、北京師範大学第二附属高校と筑波大学附属中・高等学校及び附属駒場中・高等学校も付随して結ばれたもの。
附属高等学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属高校	2006.12.1	2011.4.28～2016.4.27	教育に関する分野	相互の学校交流と生徒間交流	筑波大学が北京師範大学と交流協定を結んだ際、附属高等学校も交流組織の一つとして参加した。
附属駒場中・高等学校	中華人民共和国 北京師範大学第二附属高校	2006.12.1	2011.4.28～2016.4.27	北京師範大学附属実験中学との中等教育分野での交流	生徒の国際交流の促進	筑波大学と中華人民共和国北京師範大学との交流協定締結に協力した。
	中華民国（台湾） 国立台中第一高級中学	2015.12.11	2015.12.11～2025.12.10	研究発表（主に理系分野）、文化交流など	両校は、学術交流と学校間の提携を促進し、生徒達の国際的な視野の拡大を促進することを目的とする。	本年4月、相手校から姉妹校協定締結の申し出あり、5月1日に本校校長他が訪問した際に詳細な打合せを行った。5月27日、相手校校長が来校し、詳細事項を詰めた。
附属坂戸高等学校	インドネシア共和国 ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校	2010.12.1	2015.12.1～2020.11.30 (継続審議中)	国際教育・ESD（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	交流は筑波大学農林技術センターが2008年に採択を受けた文部科学省「国際協力イニシアチブ」教育協力拠点形成事業に端を発する。その後トヨタ財団「アジア隣人プログラム」の助成を受けた活動や「アジア高校生書き書きプログラム」などで協働。
	インドネシア共和国 林業省附属林業教育センター	2013.3.19	2013.3.19～2018.3.18 (継続審議中)	国際教育・ESD（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	以前からの「アジア隣人プログラム」や「アジア高校生書き書きプログラム」等でのインドネシアでの活動の際に協力を得たことから交流が始まった。林業教育センター・インドネシア林業省・在日インドネシア大使館の強い要望を受け協定締結に至った。
	インドネシア共和国 国立パダン第6高等学校	2015.9.1	2015.9.1～2020.8.31 (締結期間終了)	国際協働学習、ESD、ユネスコスクール間の国際ネットワーク構築	生徒及び教師の異文化理解及び国際的研究活動のため	2012年5月のインドネシアユネスコ国内委員会との交流を契機として、毎年本校と同委員会との交流を深めていった。2014年ユネスコスクール関係者が来校し、パダン校から強い関心を示され、2015年本校教諭が訪問し準備を本格的に進めることで合意した。
	フィリピン大学附属ルーラル高等学校	2015.9.1	2016.11.1～2021.10.31	国際教育・ESD（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	2010年に農林技術センターが開催した「国際農学ESDシンポジウム」において附属高校フォーラムが開催された際に、国際教育担当教員間で連携に向けた協議を開始。その後、卒業研究に関する相互受入・支援、高校生国際ESDシンポジウムにおける協働活動を重ね、2016年に交流協定に関する合意にいたり締結した。
	タイ カセサート大学附属高等学校	2017.11.9	2017.11.1～2022.10.31	国際教育・ESD（教員間の教育研究、生徒の協力的教育活動）	生徒・教員の相互交流および生徒同士の協働的教育活動の実施	2010年に農林技術センターが開催した「国際農学ESDシンポジウム」において附属高校フォーラムが開催された際に、国際教育担当教員間で連携に向けた協議を開始。その後、卒業研究に関する相互受入・支援、高校生国際ESDシンポジウムにおける協働活動を重ね、2017年に交流協定に関する合意にいたり締結した。
附属視覚特別支援学校	タイ視覚障害者支援クリスチャン財団及び財団管理下の盲学校、視覚障害関連教育・福祉施設（タイ）	2020.1.13	2020.1.1～2024.12.31	短期留学を含めた生徒間の学習活動の交流 視覚障害教育及び関連分野に関する情報交換	両組織の生徒の交流活動を通して、生徒の国際感覚及び学力の向上を推進する 両国の文化について深く学び合うとともに、視覚障害教育関連の活動を推進し、両国ならびに両組織の発展に寄与する	2015年から2017年にかけて、教育長裁量経費によりタイプログラムを実施。高等部生徒が毎年タイに渡航し、タイの視覚障害生徒との交流が行われた。 2018年度からは、文部科学省トビタリ！留学JAPANの制度を活用し、高等部生徒の短期留学が始まる。今後短期留学を定期的に実施する計画があることから、2019年に協定について打診し、2020年1月に締結に至った。
附属聴覚特別支援学校	フランス共和国 国立パリ聾学校	2003.9.22	2020.12.1～2025.12.31 (締結更新)	初等中等教育（特別支援教育）における生徒間交流	フランスと日本両国の友好と親善を促進するとともに、両国の聴覚障害教育の発展に寄与する	1999年頃、本校高等部専攻科生徒とパリ聾学校高等部職業科生徒の間で文通を開始した。 2002年、パリ聾学校校長から姉妹提携の申し出があり、2003年9月、パリ聾学校にて、交流協定書を交わした。

(2019年4月～2020年3月)

締結のメリット	協定締後の構想			その他参考になること
	教員の交流方法	児童・生徒等の交流	その他	
現在、本校は実交流をしていないので、現状ではなし。		現在は特になし	現在は特になし	現在、中学校（中等教育）レベルでの実交流はされていないが、今後将来に向け本協定が両者間（中等教育）にとつて有益となる事例を検討していきたい。
相互の文化交流と人的ネットワーク作り及び情報交換	意見交換・情報交換	相互の一日本語体験入学及び文化交流		2009年10年に相互交流を実施
この協定をきっかけに、2007年、2008年にSSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業で訪問することができた。	SSH事業として北京を訪問	SSH事業として北京を訪問		
国立台中第一高級中学は理数系に優れ、大学からの指導・サポートを受けていることなど、本学が取り組む高大連携にとって非常に参考になる。				
・本校の生徒に交換留学生としてインドネシアに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・インドネシアから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	・交換留学（現地校で他の生徒とともに授業等に参加、期間は1ヶ月程度～1年の間で状況に応じて実施） ・プロジェクト活動（SGH事業における日本およびインドネシアでの合同フィールドワーク、環境問題等についてのネット会議、など）		
異文化理解の促進および協働学習活動を通じての国際教育の実現。センターに附属する5つの学校がインドネシア各地にあり、本校としても活動フィールドを飛躍的に広げられる。付加的要素として将来的にインドネシアから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できるかもしれない。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的な交流活動（交換留学含む）		現在、協定延長に関する協議を継続中
・附属坂戸高等学校のスーパーグローバルハイスクール事業に関する支援 ・スーパーグローバル大学事業、大学の世界展開力事業に対する支援 ・ESDおよびその後継事業であるGAP活動に関する国際協力 ・生物多様性保全に関する学術交流の促進支援	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的な交流活動（交換留学含む）		インドネシアユネスコ国内委員会との連携
・本校の生徒に交換留学生とフィリピンに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・フィリピンから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的な交流活動（交換留学含む）		
・本校の生徒に交換留学生としてタイに渡航できる機会を与えられる。 ・本校の教員に国際的な教育研究活動を行う場を提供できる。 ・タイから筑波大学へ進学を希望する生徒を発掘できる。④高校生、学類生、大学院生の国際協働学習の機会を与えられる。	相互訪問および協働的教育活動の企画・指導	協働的研究活動の実施、その他一般的な交流活動（交換留学含む）		
生徒の国際的素養や国際感覚を身につけ、将来世界で活躍する視覚障害者を育成することができます。 国際教育拠点の視覚特別支援学校として、日本の視覚障害教育をタイに発信及び展開させていく。またタイのインクルーシブ教育にも貢献できる。	学校訪問、視覚障害教育に関する情報交換等	短期留学プログラムの実施 skypeを含むweb会議システムを活用した授業交流		
日本の聴覚特別支援学校（聴学校）を代表する本校が、世界最初の聴学校である国立パリ聴学校と交流関係を持つことは、グローバル化を目指す筑波大学に寄与できる。	教科指導や聴覚障害教育におけるグローバル人材育成についての情報交換および意見交換。	交流会や授業交流（英語・体育等）の実施		

項目 学校名	締結相手 (国名、機関名)	協定締結日	現締結期間	交流の分野	締結の目的	締結の経緯
附属聴覚 特別支援学校	大韓民国 国立ソウル聾学校	2015.6.1	2018.6.1～ 2023.5.31	生徒間の学習活動の 交流、聴覚障害教育 および関連分野に關 する情報交換	両校は、特別支援教育と りわけ聴覚障害教育に關 わる教員交流・生徒交 流・情報交換を通して、 両国の文化について深く 学び合うと共に聴覚 障害教育関連の活動を推 進し、両国並びに両校の 発展に寄与する。	2008年、筑波大学教員と本校校長他が 美術教育におけるICT教材の共同研究を すすめるために訪問、その後、本校中学部 生徒とのE-mailでの交流活動を行うなど 交流協定の基盤を築き締結に至った。
附属大塚 特別支援学校	大韓民国 大邱大学校大邱保明学 校	2009.12.29	2009.12.29～ 2014.12.28 <締結期間終了>	知的障害教育の実 践・研究（指導法・ 教育課程・教材教具 等）	教員の交流、生徒の交 流、共同研究・研究交流 の推進、研究成果・研究 資料の交換等	筑波大学の障害科学系と大邱大学障害児教 育が既に交流協定を締結しており、本学と 同様の特別支援学校を有することから、学 校間交流にまで協定を広げ、現場での教育 実践・研究の国際教育協力を推進する必要 があつた。
	インドネシア共和国 チバガンティ特別支援 学校	2018.2.	2018.2.～ 2020.2 <締結期間終了>	知的障害特別支援学 校における授業研究 会をとおした情報交 換・交流	・授業研究会による交流 において教師の授業力の 向上を図る	2017年11月に、本校の教諭2名がチ バガンティ特別支援学校を訪問した。授業 研究会に参加し、インドネシア教育大学に て日本の知的障害特別支援学校の教育につ いて講演をした。講演には、インドネシア 国内から特別支援教育に携わる500人以 上の教員が集まり、日本の特別支援教育への 関心の高さが窺えた。授業研究交流を通 じて互いに意見交換を行うことで、双校の 教師の授業力の向上を期待できると考え た。
附属桐が丘 特別支援学校	大韓民国 セロム学校 (旧三育再活学校)	2010.2.3	2015.2.13～ 2018.2.12	・児童生徒間の学習 活動の交流 ・肢体不自由教育及 び関連分野に関する 情報交換	・日韓両国のが肢不自由 教育の充実と発展に寄与 するため。 ・国際教育の視点の一つ である日韓の相互理解と 親善を図るため。 ・附属学校の中期目標に 上げている“国際教育拠 点事業”の一層の充実を 図るため。	2007年・2008年、両校の研究部長が 双方で開催された研究会に出席し、それ ぞれ取組を発表。2008年度末、本校の代 表生徒1名を含む訪問団を同校に派遣。 2009年、校長ほか2名が同校を訪問 し、国際交流協定締結に向けた事前調整を 実施。同時にスカイプを使った交流授業を 開始。2010年2月、再び同校の校長、 研究部長等を本校の研究協議会に招聘し、 開催日前に国際交流協定を締結。
	台湾 国立南投特殊教育学校	2016.11.24	2016.11.24～ 2021.11.23	・児童生徒間の学習 活動の交流 ・特別支援教育及び 関連分野に関する情 報交換	・両校の交流活動（相互 訪問等）や教員間の情報 交換を実施しやすくする ため。 ・児童生徒の異文化体験 の機会を確保し、児童生 徒の気付きや学びを複眼 的・多角的に深めていく ため。 ・日台双方のが肢不自由 教育及び特別支援教育の 発展に寄与するため。	2014年5月、台湾国立南投特殊教育学 校の校務顧問が来校し、国際交流協定締結 の可否について打診。これを受け、同年 11月に本校校長ほか3名が同校を視察 し、国際交流協定の締結の可否について検 討。2015年10月、同校校長を含む訪 問団が来校し、その際に2016年の国際 交流協定締結を約束するに至った。
	台湾 国立和美実驗学校	2016.11.25	2016.11.25～ 2021.11.24	・児童生徒間の学習 活動の交流 ・特別支援教育及び 関連分野に関する情 報交換	・両校の交流活動（相互 訪問等）や教員間の情報 交換を実施しやすくする ため。 ・児童生徒の異文化体験 の機会を確保し、児童生 徒の気付きや学びを複眼 的・多角的に深めていく ため。 ・日台双方のが肢不自由 教育及び特別支援教育の 発展に寄与するため。	2014年11月、本校校長ほか3名が、 台湾唯一のが肢不自由者を教育する特殊教 育学校である同校を視察。2015年11 月、本校副校長ほか2名と代表生徒2名 で同校を訪問し、国際交流協定締結の可否 について打診。その際、2016年の国際 交流協定締結について内諾を得た。
附属久里浜 特別支援学校	中華人民共和国 浙江省寧波市 達敏学校	2011.8.29	2016.8.29～ 2021.8.28	・教員間の教育実践 研究 ・児童生徒間の教育 活動	・日中両国の自閉症児教 育の充実と発展に寄与す るため。 ・日中の相互理解と親善 を図る。	2009年5月、中国寧波市達敏学校校長 が本校を訪問し教育実践を視察の結果、本 校への教員派遣・研修の実施の希望があり 、3回にわたって教員研修の受け入れを 実施。2011年度、達敏学校が全中国の 特別支援学校の研究指定校となり、国際的 な研究会議や研究発表等の実施を予定して いたため、それに向けて本校との姉妹校協 定締結について申し出があり、同年8月 29日に協定書を交わした。2016年8 月に締結期間を5年延長。
	中華人民共和国 江蘇省蘇州工業園區 仁愛学校	2014.9.28	2014.9.28～ 2019.9.27	・教員間の教育実践 研究	・日中間の文化交流を深 め、両国の特別支援教育 領域の促進を図るため。	2014年1月、副校長と小学部主事およ び幼稚部教諭の3名で中国江蘇省蘇州工 業園区仁愛学校の求めに応じ視察を行つ た。その後、立命館大学に留学予定のある 教員が本校の実践研究協議会に参加した。 同校の校長や教員から、本校への教員派 遣・研修の実施の要望があり、2014年 9月の2度目の視察の際に日中自閉児教 育研究会を同校にて実施するともに、本校 との姉妹校協定締結を行つた。

締結のメリット	協定締結後の構想			その他参考のこと
	教員の交流方法	児童・生徒等の交流	その他	
スーパーグローバル大学である本学の附属学校として、聴覚障害教育の専門性の向上に貢献でき、韓国の特別支援教育に関する最新情報（障害者の権利に関する条約批准の状況、教育課程、教科書等）を得ることができる。	学校訪問、情報交換	ネットワーク回線を利用した遠隔地間授業交流	研究会等での発表	
両国が同じような教育条件・教育環境にあることから、特別支援教育に関してアジアからの情報発信ができる。特別支援学校が5校（視覚障害・聴覚障害・肢体不自由・情緒障害・知的障害）あることの共通性を生かして、他4校の交流に発展できる。	両校とも校費による海外出張で相互に交流する。	メールやHPなどを通じて児童生徒間の交流を進め、将来は高等部修学旅行を韓国として、大邱保明学校への交流訪問を実現させたい。		大邱保明学校には、日本語に比較的堪能な教諭があり、大邱大学教員（洪先生 本学障害科学系DC修了）が通訳しなくても交流が可能であることが分かった。
・授業研究交流を通して互いに意見交換を行うことで、双校の教師の授業力の向上を期待できる。 ・交流を通して得られた知見の発表し、知的障害教育の実践分野における国際教育拠点として貢献できる。	互いの学校の授業研究会に教諭をそれぞれ派遣し、情報交換、意見交換を行う。 授業研究におけるWeb会議を通して、教員間の相互の専門性の向上を図る。事前に授業研究の動画と指導計画（翻訳済み）を確認してから研究会議に臨む。	Web環境を整え、今後生徒間の交流をインターネット回線やビデオレター等を使って交流を実施させたい。		交流時期と両国を結ぶ通訳者の安定的な供給が必要である。その為の予算確保。
・お互いの学校の研究テーマに沿って意見交換、情報交換ができる。また、研究発表の場を相互に設けることができる。 ・児童生徒の異文化理解を広げ、海外の児童生徒とコミュニケーションする機会を確保することができる。（外国语学習への意欲を高める。） ・筑波大学と桐が丘特別支援学校の存在を韓国でより広く知ってもらえる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換、研究会参加、研究成果共同出版。	学校訪問、ビデオレター等の交換、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介、スカイプを使った交流授業。		2010年、高等部3年が韓国に修学旅行で渡航し、三育再活学校（現セロム学校）を表敬訪問。当初、高等部生徒による交流活動だけであったが、2012年より小学部児童・中学部生徒も交流活動に加わるようになった。
・韓国セロム学校との国際交流に加え、新たに台湾交流を始めることにより、児童生徒の異文化理解の場を広げることができる。 ・国際教育拠点事業の拡充につながる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換。	学校訪問、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介、スカイプを使った交流授業。		現時点では、高等部生徒による交流活動のみ。
・韓国セロム学校との国際交流に加え、新たに台湾交流を始めることにより、児童生徒の異文化理解の場を広げることができる。 ・国際教育拠点事業の拡充につながる。	研究テーマ、課題、方法等について意見交換、情報交換。	学校訪問、図工・美術等の作品交換、行事等の紹介、スカイプを使った交流授業。		現時点では、高等部生徒による交流活動のみ。
特別支援学校関係での中国との交流は、まだ十分とは言えず、この交流が実現すれば、今後のこの分野における教育の充実の基礎となることが期待される。	・自閉症児への指導方法、指導内容等にかかわって、研修交流及び研究にかかわる指導助言。	予定なし	達敏学校の教育実践の様子を視察するとともに、実践研究について交流し、必要に応じて指導助言する予定。また2012年度の達敏学校を会場として行われた研究会に参加した。	2012年度は訪中して達敏学校の授業参観や研究会の具体化を計画したが、日中関係の悪化によって見合わせた。ただし、日常的にカンファレンスなどの実績ができるよう、通信環境や機材の整備を行った。訪日した校長や副校長と今後の交流の在り方に関する意見交換を行った。2017、2018年度と2回に分け、達敏学校の全教員の研修を受け入れた。
中国は近年自閉児教育の充実に力点を置いていて、日本の教育の支援を強く希望している。両国の自閉症を中心とした特別支援教育の発展に向けて本校が貢献できるよい機会となる。	・自閉症児への指導方法、指導内容等にかかわって、研修交流及び研究にかかわる指導助言。2015年以降は、本校の公開授業の動画データなどを用いて、skypeによるケースカンファレンスや授業研究会などを定期的に行っている。	本校のきらきらコンサート、運動会などの催しをskypeにて配信し、児童間の交流も行う予定である。	定期的に同校から教員の派遣を受け入れ、本校において研修を行う予定である。	

締結・更新の記録

年 度	学 校 名	新規／更新	相手校・機関
平成 21（2009）年度以前	附属中学校	新規	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高等学校	新規	//
	附属駒場中・高等学校	新規	//
	附属聴覚特別支援学校	更新	国立パリ聾学校（フランス共和国）
	附属大塚特別支援学校	終了	大邱大学校大邱保明学校（大韓民国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	三育再活学校（大韓民国）
平成 22（2010）年度	附属坂戸高等学校	更新審議中	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
平成 23（2011）年度	附属中学校	更新	北京師範大学第二附属高校（中華人民共和国）
	附属高校	更新	//
	附属駒場中・高等学校	更新	//
	附属久里浜特別支援学校	新規	浙江省寧波市達敏学校（中華人民共和国）
平成 24（2012）年度	附属坂戸高等学校	更新審議中	林業省附属林業教育センター（インドネシア共和国）
平成 26（2014）年度	附属桐が丘特別支援学校	更新	セロム学校（旧三育再活学校）（大韓民国）
	附属久里浜特別支援学校	新規	江蘇省蘇州工業園区仁愛学校（中華人民共和国）
平成 27（2015）年度	附属駒場中・高等学校	更新	国立台中第一高級中学（中華民国（台湾））
	附属坂戸高等学校	更新	ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア共和国）
	//	終了	国立パダン第6高等学校（インドネシア共和国）
	附属聴覚特別支援学校	更新	国立パリ聾学校（フランス共和国）
	//	新規	国立ソウル聾学校（大韓民国）
平成 28（2016）年度	附属小学校	新規	光州松源書等学校（大韓民国）
	附属坂戸高等学校	新規	フィリピン大学附属ルーラル高等学校（フィリピン共和国）
	附属桐が丘特別支援学校	新規	国立和美実驗学校（台湾）
	附属久里浜特別支援学校	更新	浙江省寧波市達敏学校（中華人民共和国）
平成 29（2017）年度	//	新規	国立南投特殊教育学校（台湾）
	附属坂戸高等学校	新規	カセサート大学附属高等学校（タイ）
	附属大塚特別支援学校	終了	チバガンティ特別支援学校（インドネシア共和国）
平成 30（2018）年度	附属桐が丘特別支援学校	更新	社会福祉法人 SRC 附属広州セロム学校（旧セロム学校）（大韓民国）
	附属聴覚特別支援学校	更新	国立ソウル聾学校（大韓民国）
令和元（2019）年度	附属視覚特別支援学校	新規	タイ視覚障害者支援クリスチャン財団及び財団管理下の盲学校、視覚障害関連教育・福祉施設

(資料) 報告書発行の記録

第1集（2007～2008年度） 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想に関わって～	2009年2月発行
第2集（2009～2010年度） 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2011年7月発行
第3集（2011年度） 国際教育が学校教育を豊かにする ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2012年3月発行
第4集（2012年度） 新たな国際教育の展開 ～附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために～	2013年3月発行
第5集（2013年度） 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材の育成を目指して～	2014年3月発行
第6集（2014年度） 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～グローバル人材育成の充実を目指して～	2015年3月発行
第7集（2015年度） 附属学校の「国際教育拠点」活動の新たな展開 ～ダイバーシティ共生社会を創る人材育成の発展を目指して～	2016年3月発行
第8集（2016年度） 附属学校群の国際教育の推進	2017年3月発行
第9集（2017年度） 附属学校群の国際教育の推進	2018年3月発行
第10集（2018年度） 附属学校群の国際教育の推進	2019年3月発行
第11集（2019年度） 附属学校群の国際教育の推進	2020年3月発行
第12集（2020年度） 附属学校群の国際教育の推進	2021年3月発行

令和2年度附属学校国際教育推進委員会名簿

委員長	濱本 悟志	教育局教授・次長
	雷坂 浩之	教育局教授・教育長補佐
	下山 直人	教育局・教授
	木村 範子	教育局・講師
	荒井 穂菜美	教育局・特任助教
	飯田 順子	教育局・准教授
	鷺見 辰美	附属小学校
	和田 亜矢子	附属中学校
	勝田 仁之	附属高等学校
	八宮 孝夫	附属駒場中・高等学校
	建元 喜寿	附属坂戸高等学校
	青松 利明	附属視覚特別支援学校
	鎌田 ルリ子	附属聴覚特別支援学校
	仲野 みこ	附属大塚特別支援学校
	小泉 清	附属桐が丘特別支援学校
	石川 千尋	附属久里浜特別支援学校